日田市埋蔵文化財調査報告書第51集

本村遺跡３次

２００４年

日田市教育委員会

序　　文

本村遺跡は日田盆地北部の台地裾部に位置します。遺跡は古墳時代の豪族居館などが発見された小迫辻原遺跡の南東側にあり、また谷を挟んで南側の台地上には弥生時代の王墓が発見された吹上遺跡があり、日田の中でも重要な遺跡が集中する地域であります。

今回の調査では弥生時代後期、古墳時代後期から古代にかけての集落が多数確認され、特に小迫辻原遺跡・吹上遺跡と同時代の集落が確認されたことで、当時の社会を考える上では非常に重要な遺跡であることが判明しました。

本書が、文化財の保護や地域の歴史、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました事業者や地権者の方、ならびに作業に従事いただきました地元の皆様方に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

平成16年３月

日田市教育委員会
教育長　諫　山　康　雄

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経過と組織 …… 1
（1）調査の経緯 …… 1
（2）調査の組織 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ　調査の内容 …… 5
（1）調査の概要 …… 5
（2）弥生時代の遺構と遺物 …… 5
（3）古墳時代～古代の遺構と遺物 …… 13
Ⅳ　まとめ …… 22
（1）弥生時代の遺構と遺物について …… 22
（2）古墳時代～古代の遺構と遺物について …… 23
（3）本村遺跡の性格について …… 24

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（1/5,000）…… 1
第２図　周辺遺跡分布図（1/15,000）…… 4
第３図　遺構配置図（1/300）…… 6
第４図　竪穴住居跡実測図（１）（1/80）…… 7
第５図　竪穴住居跡実測図（２）（1/80）…… 8
第６図　竪穴住居跡実測図（３）（1/80）…… 9
第７図　３２号竪穴住居跡出土鏡片実測図（1/2）…… 9
第８図　出土土器実測図（１）（1/6）…… 10
第９図　竪穴住居跡実測図（４）（1/80）…… 11
第１０図　２号竪穴遺構実測図(1/80) …… 11
第１１図　出土土器実測図（２）（1/6）…… 12
第１２図　出土石器実測図（１）（1/3・1/2・1/4）…… 13
第１３図　出土石器実測図（２）（2/3）…… 13
第１４図　竪穴住居跡実測図（５）（1/80）…… 14
第１５図　竪穴住居跡実測図（６）（1/80）…… 15
第１６図　竪穴住居跡実測図（７）（1/80）…… 16
第１７図　カマド実測図（1/50）…… 18
第１８図　１・２号掘立柱建物・１号竪穴遺構・1号溝実測図（1/80）…… 19
第１９図　出土土器実測図（３）（1/4・1/6）…… 20
第２０図　出土石製品・鉄器・玉類実測図（1/2）…… 21

挿　入　写　真　目　次

写真１　32号竪穴住居仿製鏡片出土状況 …… 9

写 真 図 版 目 次

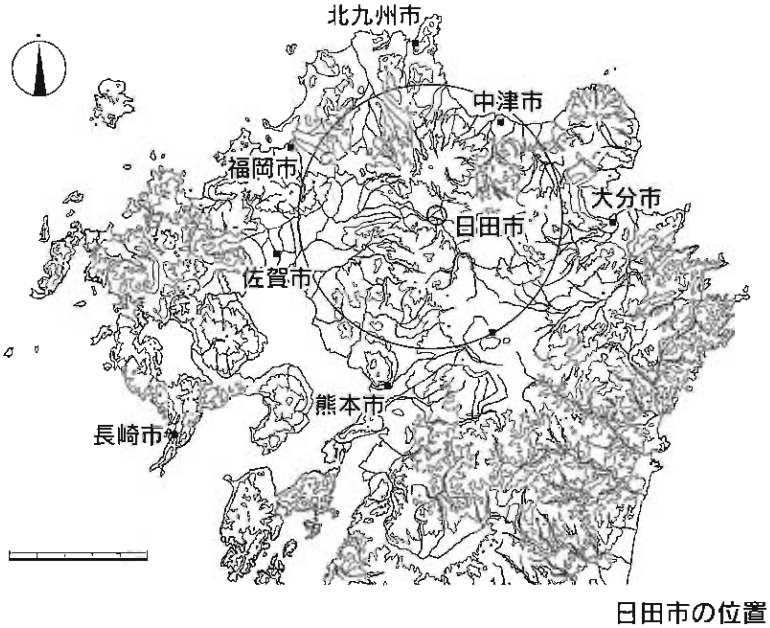
写真図版１
① 本村遺跡全景（南東より）
② 本村遺跡全景（真上より）
③ ２・43号竪穴住居跡完掘状況（東より）
④ ８号竪穴住居跡完掘状況（南東より）
⑤ ９・10号竪穴住居跡完掘状況（南より）
⑥ 12・37号竪穴住居跡発掘状況（南より）
⑦ 19号竪穴住居跡完掘状況（南東より）
⑧ 21号竪穴住居跡完掘状況（南より）
写真図版２
① 24号竪穴住居跡完掘状況（南より）
② 26号竪穴住居跡完掘状況（南より）
③ 28号竪穴住居跡完掘状況（南より）
④ 32号竪穴住居跡完掘状況（南より）
⑤ 33号竪穴住居跡完掘状況（南より）
⑥ 35号竪穴住居跡完掘状況（南東より）
⑦ 38号竪穴住居跡完掘状況（南より）
⑧ ２号竪穴遺構完掘状況（南より）
写真図版３
① １号竪穴住居跡完掘状況（南より）
② ３号竪穴住居跡完掘状況（南東より）
③ ４号竪穴住居跡完掘状況（西より）
④ ５号竪穴住居跡完掘状況（南より）
⑤ ７号竪穴住居跡完掘状況（南東より）
⑥ 11号竪穴住居跡完掘状況（南より）
⑦ 13号竪穴住居跡完掘状況（南より）
⑧ 14・16号竪穴住居跡完掘状況（南より）
写真図版４
① 17号竪穴住居跡完掘状況（南東より）
② 22号竪穴住居跡完掘状況（南より）
③ 23･25号竪穴住居跡完掘状況（南より）
④ 31号竪穴住居跡完掘状況（南より）
⑤ 34号竪穴住居跡完掘状況（南より）
⑥ 41号竪穴住居跡完掘状況（東より）
⑦ １号竪穴遺構完掘状況（南より）
⑧ １号溝発掘状況（南より）
写真図版５～７　　出土遺物（１）～（３）

表 目 次

第１表　出土土器観察表（１）…… 26
第２表　出土土器観察表（２）…… 27
第３表　出土石器観察表 …… 27
第４表　出土石製品観察表 …… 27
第５表　出土鉄器観察表 …… 27
第６表　出土土製品観察表 …… 27
第７表　出土玉類観察表 …… 27

例　　言

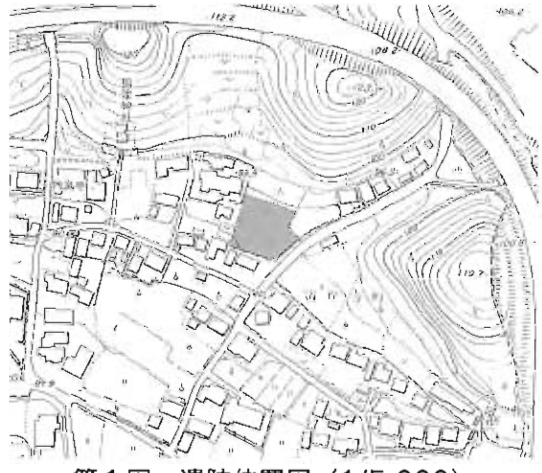
1．本書は日田市教育委員会が平成12・13年度に実施した本村遺跡３次調査の発掘調査報告書である。
2．調査は、当委員会が宅地造成工事に伴い、有限会社宝珠開発の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3．調査にあたっては地権者の大蔵宗利氏、有限会社ランドマップの協力を得た。
4．調査現場での実測、写真撮影は行時・若杉が行った。
5．本書に掲載した遺物実測ならびに遺構・遺物の製図は若杉のほか、藤野美音氏が行った。
6．遺物の写真撮影は長谷川正美氏（有限会社　雅企画）の委託による。
7．挿図中の方位、文中の方位角は真北を示す。
8．写真図版の遺物に付した数字番号は、実測図番号に対応する。
9．出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
10．本文中においては竪穴住居跡→住居、掘立柱建物→建物、竪穴遺構→竪穴と略称を用いている。
11．本書の執筆・編集は若杉が行った。



日田市の位置

Ⅰ　調査に至る経過と組織

（1）調査の経緯



第１図　遺跡位置図（1/5,000）

平成12年９月20日、有限会社宝珠開発より日田市大字渡里字本村936番地の１ほかに1,301㎡を対象とした宅地造成に伴う埋蔵文化財の所在の有無についての照会文が提出された。当該事業予定地の東側では同年７月に畑地造成に伴う発掘調査を行い、弥生時代～古代の集落、近世の溝や墓など確認されていることから、本予定地でも遺跡の存在する可能性が大きいとして、事業者に対して試掘調査を行う旨を回答した。試掘調査は平成12年11月21、22日の２日間行い、その結果、弥生時代から古代にかけての住居などが検出された。その後、事業者側と遺跡の取扱いについて協議を行い、事業面積1,301㎡のうち、道路位置指定にかかる部分及び掘削を受ける標高の高い部分の約450㎡を調査の対象とし、発掘調査を平成12、13年度、整理作業を平成13年度、報告書作成を平成14年度に行うことで合意した。平成13年２月１日に委託契約書を交わし、同年２月13日より発掘調査を開始した。

調査では弥生時代後期から古代にかけての遺構が複雑に切り合っていたため、その検出、掘り下げに時間を要した。平成12年度の調査は同年３月28日に終了、平成13年４月９日より調査を再開した。遺構の掘り下げを進めるのに平行し、写真撮影、遺構実測を行い、平成13年５月10日に空中写真撮影を行い、同年５月18日にすべての遺構の掘り下げを終了、その後、遺構実測図の作成を行い、５月31日に器材の撤収を行い、すべての調査日程を終了した。その後、平成14年３月19日から27日まで遺物の整理作業を行い、平成14年度に主要な遺物の写真撮影を行った。なお、当初、平成14年度に報告書の作成を予定していたが、終了が困難であったため、平成15年度に再度委託契約書を交わし、報告書作成・印刷を行った。

（2）調査組織

発掘調査から報告書作成までの関係者は以下のとおりである。

平成12・13年度／試掘調査・発掘調査（職名は当時のままとしている。）

調査主体　日田市教育委員会

調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）

調査事務　原田俊隆（同文化課長）石井英信（同文化課課長補佐兼文化財係長）
佐々木豊文（同文化課主査）～平成13年３月31日
島崎誠司（同文化課主査）平成13年４月１日～
江田香織（同臨時職員）～平成13年３月31日
原田恭子（同臨時職員）平成13年４月１日～平成14年３月31日

調査担当　行時志郎（同文化課主任）若杉竜太（同文化課主事）

調査員　吉田博嗣（同文化課主任）渡邊隆行（同文化課主事）

来訪者　岡村道雄（文化庁調査官）小田富士雄（福岡大学教授）下村智（別府大学助教授）
渋谷忠章（大分県文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長）

調査作業員　手嶋トシエ、安心院照雄、清水忠造、安達アサ子、中尾タマエ、安達ツヤ子
蒲池妙子、秋吉利彦、安達義男、穐本文雄、行村シズエ、高村笑美子
整理作業員　黒木千鶴子、伊藤一美

平成14・15年度／報告書作成・報告書印刷
調査主体　日田市教育委員会
調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）～平成15年７月
諫山康雄（　　同　　教育長）平成15年８月～
調査統括　後藤 清（同文化課長）
調査事務　田中伸幸（同文化課文化財管理係長兼埋蔵文化財係長）～平成15年３月31日
佐藤 晃（同文化課主幹兼埋蔵文化財係長）平成15年４月１日～
園田恭一郎（同文化課主査）酒井恵（同文化課主事補）
報告書担当　若杉竜太（同文化課主事）
調査員　土居和幸（同文化課主査）行時桂子（同文化課主任）渡邊隆行（同文化課主事）

II　遺跡の立地と環境

本村遺跡は日田盆地の北部に位置する辻原台地南東側の裾部に位置する。また、遺跡の北東側には山田原台地があり、遺跡は辻原台地と山田原台地のちょうど中間あたりの位置することになる。これらの台地は盆地内に数多く分布するが、これらは阿蘇４火砕流の堆積物が河川の侵食によって形成されたものである。主なものとして三隈川以北には辻原台地をはじめとして、山田原・宮原・吹上原・佐寺原・中尾原が、三隈川以南には陣ヶ原・長者原・上野原などの台地が点在する。これらの台地は標高が約120m前後で周辺の沖積地との比高差は約40mである。

これらの台地には弥生時代から古代を中心に遺跡が数多く存在する。特に本村遺跡の周辺には日田を代表する遺跡が多い。以下、これらの遺跡を概観していく。

本村遺跡の北西側に位置する辻原台地にある小迫辻原遺跡[1]では、弥生時代終末期の環濠集落、古墳時代前期初頭の居館遺構が確認されており、環濠集落から居館への変遷過程を知り得る重要な遺跡である。また、小迫辻原遺跡では「L」字、もしくは「コ」字状に配置された掘立柱建物群や竪穴などが検出され、遺構から「大領」銘の墨土器も出土し、古代官衙との関連も指摘される。
辻原台地の東側に位置する山田原台地では台地南東部に位置する後迫遺跡[2]で多くの遺構が確認されている。弥生時代前期末から後期にかけての住居、掘立柱建物や甕棺墓、石棺墓や古墳時代前期の石棺墓、奈良時代の住居や掘立柱建物が確認されている。

辻原台地と山田原台地の中間に位置する草場第二遺跡[3]では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての約300基の甕棺墓、石棺墓、方形周溝墓などが確認され、小型倣製鏡の破片も出土している。
辻原台地の北西側に展開する宮原台地では宮ノ原遺跡[4]で弥生時代中期後半から後期中頃の住居や甕棺墓が確認されている。また、11世紀末～13世紀前半頃の墓が調査され、湖州鏡や和鋏などが出土している。台地の南側縁辺部には６世紀第二四半から第三四半にかけて築造された２基の前方後円墳から成る朝日天神山古墳群[5]が存在する。このうち２号墳は日田玖珠地方では最大、後期古墳では県内でも最大級の古墳であることが判明している。本村遺跡の南側にある吹上原台地[6]では弥生時

1 本村遺跡
① 3次調査
② 2次調査
③ 1次調査
④ 4次調査
2 草場第二遺跡
3 小迫辻原遺跡
4 草葉遺跡
5 後迫遺跡
6 羽野横穴墓群
7 岩崎遺跡
8 朝日宮ノ原遺跡
9 朝日天神山古墳群
10 尾部田遺跡
11 小迫横穴墓群
12 小迫古墳
13 朝日ヶ丘遺跡
14 吹上遺跡
15 北友田横穴墓群
16 今泉遺跡
17 月隈横穴墓群
18 永山布政所跡
19 荻鶴遺跡

第2図　周辺遺跡分布図（1/15,000）

代中期の首長墓が確認された吹上遺跡がある。特に６次調査で確認された甕棺墓からはゴホウラ製の貝輪や鉄剣・銅鉾などが出土しており、盆地を治めた首長の墓と目されている。また、後期の環濠集落も確認されている。

吹上原台地の西側にある朝日ヶ丘遺跡[7]では縄文時代の落し穴が確認されている。また、台地の北側縁辺部では４世紀後半から５世紀前半の円墳で粘土槨・木棺を主体部とする小迫古墳[8]や小迫横穴墓群[8]が展開する。さらに台地の北側裾にある尾部田遺跡[9]では縄文時代後期、弥生時代終末から古代にかけての住居や掘立柱建物が確認されている。

このように本村遺跡を取り巻く台地上には各時代を通じて、数多く遺跡が存在する。しかし近年、台地上だけでなく、台地裾部や沖積地上でも台地上と同時代の遺跡が存在することが明らかになってきている。尾部田遺跡や本村遺跡もその例であり、特に弥生時代から古墳時代にかけての集落の在り方が注目されている。

註

1）田中裕介編『小迫辻原遺跡Ⅰ　A・B・C・D区編』九州横断自動車道建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書10　大分県教育委員会　1999

2）友岡信彦編『後迫遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書18　大分県教育委員会　2001

若杉竜太編『後迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第35集　日田市教育委員会　2002

3）高橋徹編『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書１　大分県教育委員会　1989

4）土居和幸編「朝日宮ノ原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ』日田市教育委員会　1989

5）土居和幸・若杉竜太・渡邊隆行編「天満古墳群」『平成９～11年度（1997～1999年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1999～2001

土居和幸・下村智編『吹上遺跡・天満古墳―範囲確認調査に伴う概要報告―』日田市教育委員会　2000

行時桂子編「朝日天神山古墳群」『平成14年度（2002年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2003

6）村上久和編『吹上遺跡Ⅰ・Ⅱ』日田市教育委員会　1980・1981

土居和幸「吹上遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ』日田市教育委員会　1986・1987

行時志郎「吹上遺跡（Ⅲ）」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅵ』1991

土居和幸・永田裕久編『吹上遺跡―６次調査の概要―』日田市教育委員会　1995

土居和幸・行時志郎編「吹上遺跡」『平成８・９年度（1996・1997年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998・1999

下村智・上野淳也編『吹上遺跡―第９調査の概要報告―』日田市教育委員会　1999

土居和幸・下村智編『吹上遺跡・天満古墳―範囲確認調査に伴う概要報告―』日田市教育委員会　2000

渡邊隆行編「吹上遺跡」『平成12年度（2000年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001

土居和幸・行時志郎・下村智編『吹上Ⅰ　３～５次調査の調査報告』日田地区遺跡群発掘調査報告３・日田市埋蔵文化財調査報告書第42集　2003　日田市教育委員会

7）五十川雄也・土居和幸・若杉竜太編『朝日ヶ丘遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第18集　2000

8）小柳和宏編『小迫墳墓群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書３　大分県教育委員会　1995

9）行時志郎編『日田条里上手地区』・高瀬条里永平寺地区・尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第34集　日田市教育委員会　2001

Ⅲ　調査の内容

（1）調査の概要（第３図）

今回の調査で検出した遺構は弥生時代～古代の住居42軒、竪穴遺構２基、掘立柱建物２棟、溝１条である。これらの遺構は複雑な切り合い関係にあり、重層的に存在していた。遺構面は現在の地表面より70～80cm下にあり、上から表土、黒褐色粘質土、暗茶褐色粘質土の順に堆積していた。これらの土には大量に土器が含まれていた。遺構検出面（地山）ははやや暗めの黄褐色粘質土であったが、前述のしたようにほとんどの遺構の切り合っていたため、調査区内で確認できた遺構検出面の範囲はごくわずかであった。また、遺跡は台地の裾に位置していることから、北側から南側に向かって緩やかに傾斜しているが、住居の多くが南側が削平を受けていることから、旧地形は現在の地形よりも傾斜は緩かったと思われる。以下、時代別に説明を加える。

（2）弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は住居が18軒、竪穴遺構が１基確認された。遺構も弥生時代後期後半から終末にかけてのものが中心となっており、一部後期中頃のものも見られる。

２号住居（第4･8図　図版1･5）調査区の西端で検出された。43号住居を切り、１・３号住居に切られる。平面形は南面土坑の位置から方形を呈すと考えられ、西側は調査区外へ展開する。また、柱穴と炉の位置関係から主柱穴は２本と考えられる。規模は3.79m×3.19m＋α、床面までの深さは14cmを測る。遺物は甕などが出土している。

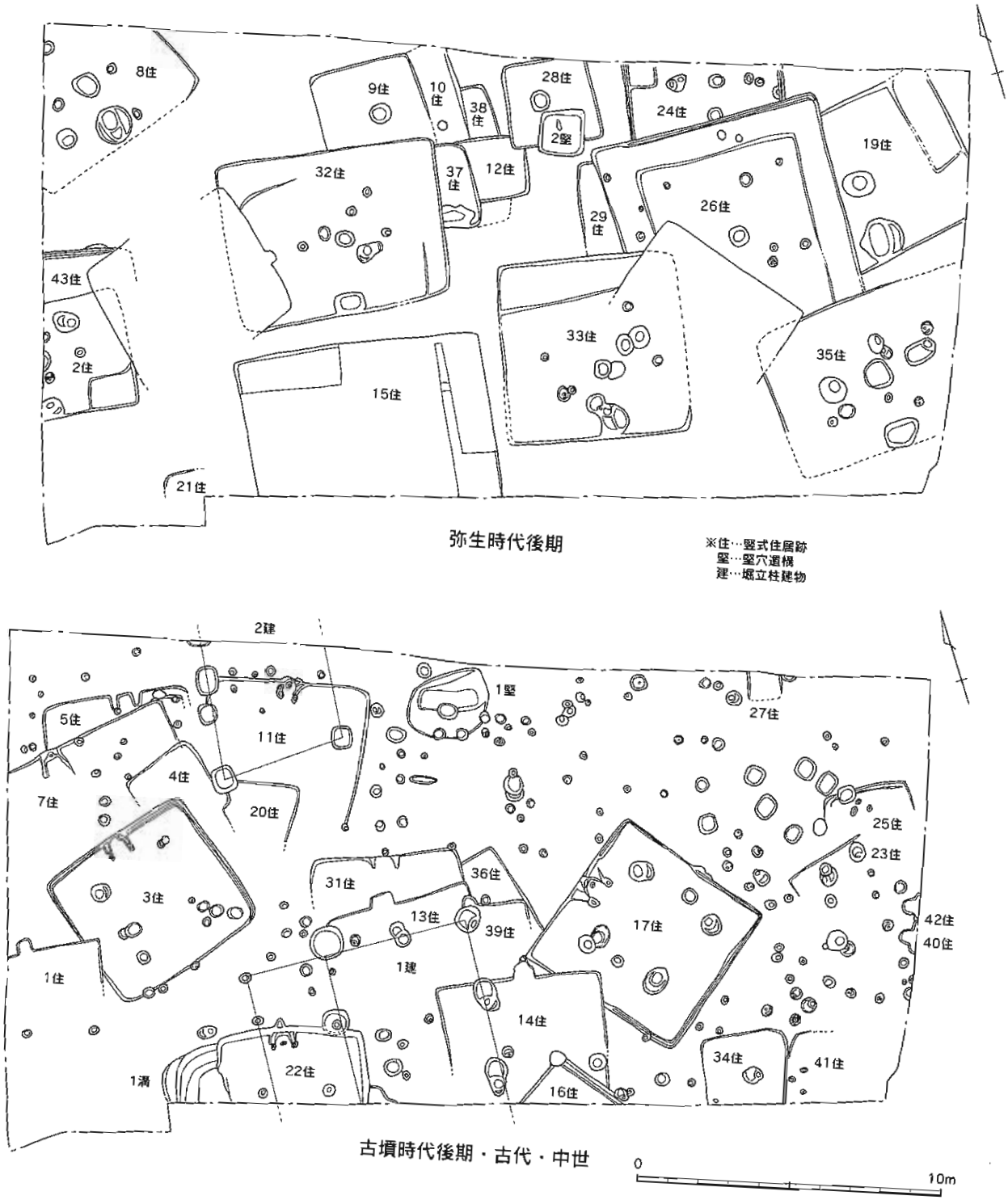
８号住居（第4･8･12図　図版1･5･7）調査区の北西端で検出された。５・７号住居に切られる。北側は調査区外へ広がるが、平面形は方形を呈すと考えられる。規模は5.51m×4.70m＋α、床面までの深さは27cmを測る。中央に炉を持ち、主柱穴は２本である。遺物は甕、石庖丁などが出土している。

９・10号住居（第4･8･12･20図　図版1･5･7）調査区の北側で検出された。９号竪穴住居が10号住居をきる。また、10号住居は38号住居を切るが、９号住居ともに12・32・37号住居に切られる。９号住居は方形の平面形を呈し、規模は3.48m×2.69m＋α、床面までの深さは42cmである。中央に炉を持つが、主柱穴は確認できなかった。10号住居はコーナーの一部が調査区外へ広がる。平面形は方形を呈すると思われ、規模は3.15m×1.22＋α、床面までの深さは28cmである。南側にはベッドが確認された。遺物は壺・器台、砥石などが出土している。

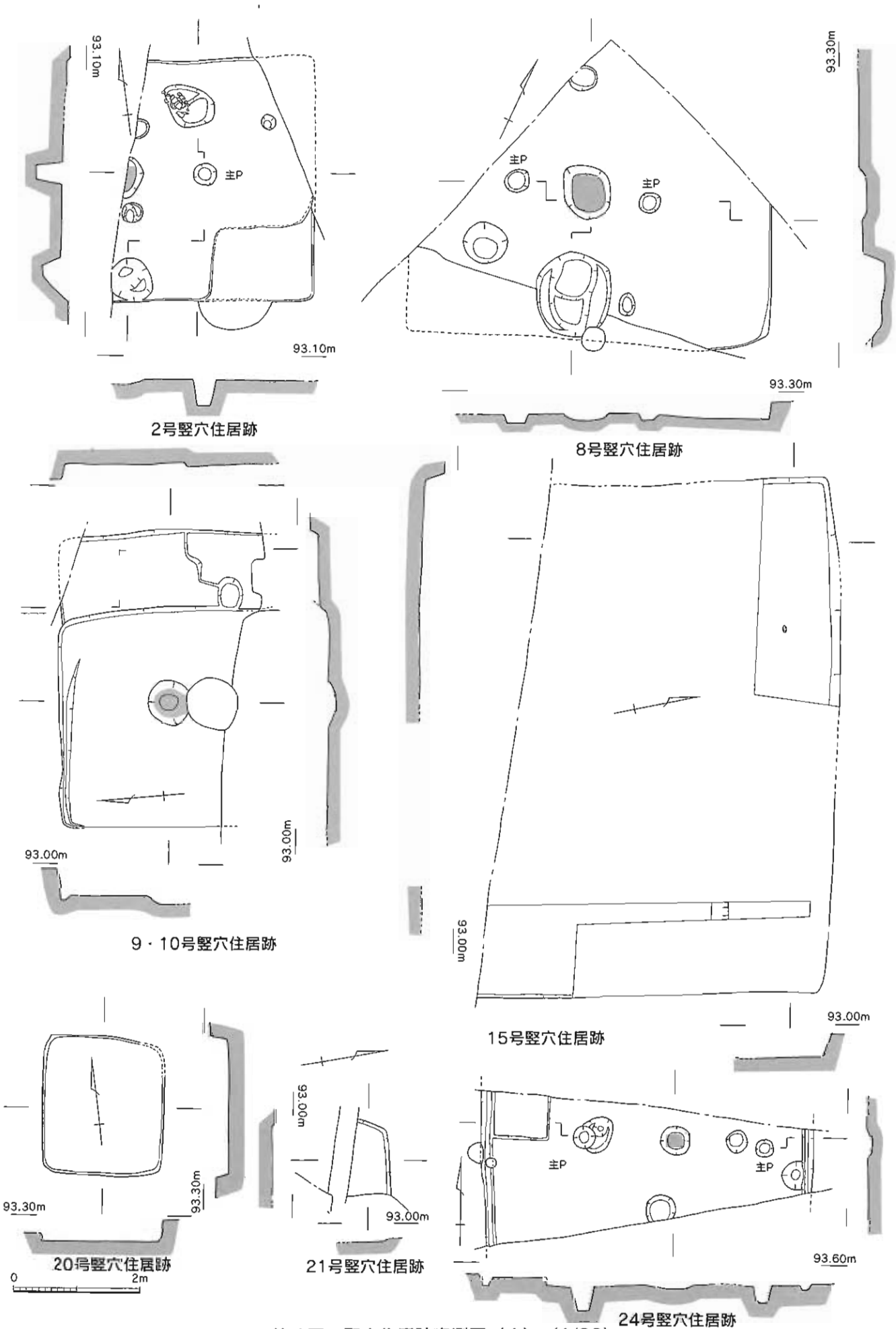
12号住居（第4･8･12図　図版1･5･7）10号住居の南側で検出された。10・38号住居を切り、37号住居に切られる。平面形は方形を呈し、規模は2.20m×1.92m、床面までの深さは34cmである。主柱穴は確認できなかったが、中央部に少量の焼土が確認され、炉の可能性が考えられる。遺物は高杯、石庖丁などが出土している。

15号住居（第4･8･13･20図　図版1･5･7）調査区の南側中央で確認された。14・22・45号住居に切られる。この住居部分は盛土になるため、トレンチのみの確認を行なった。平面形は方形を呈し、規模は8.10m×5.40m＋α、床面までの深さは47cmである。遺物は甕・壺・高杯・器台、石鏃などが出土している。

19号住居（第5･8･20図　図版1･5･7）調査区の北東端で確認された。23・25・26・27号住居に切られる。平面形はほぼ長方形を呈し、規模は6.03m×5.24m、床面までの深さは29cmであ



第３図　遺構配置図（1/200）



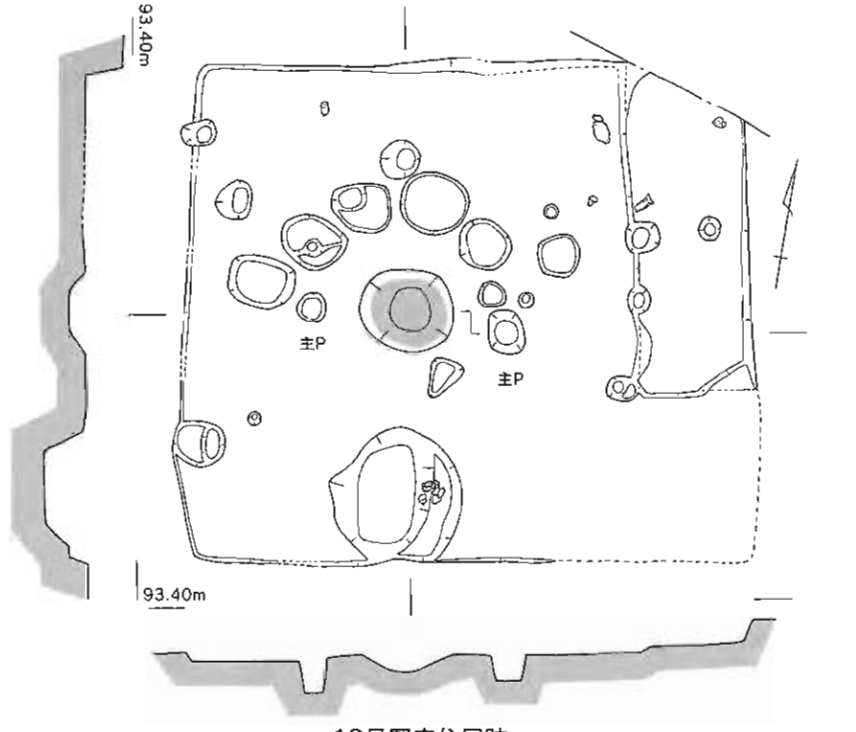
第４図　竪穴住居跡実測図（１）（1/80）

る。中央に炉を持ち、主柱穴は２本である。東側にはベッドがみられ、南面土坑をもつ。遺物は外来系の甕、壺、石庖丁などが出土している。

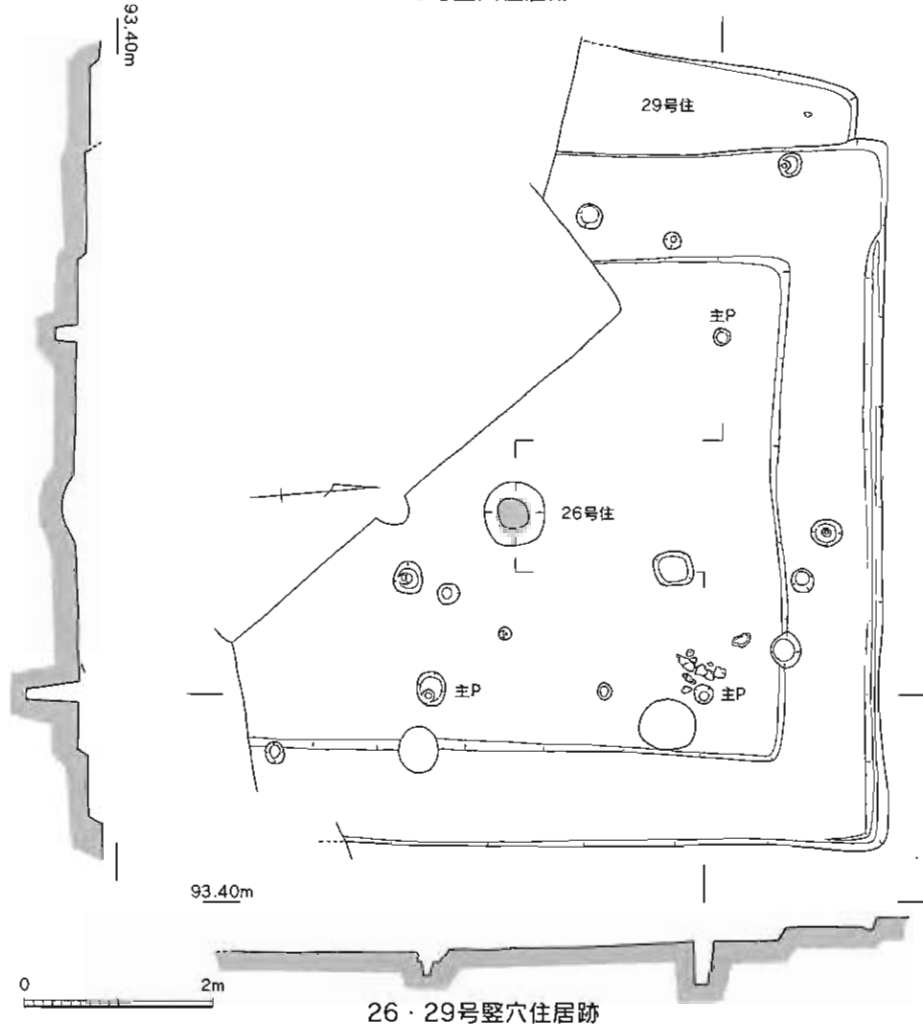
21号住居（第4･8図 図版1）調査区の南西側で確認され、１号溝に切られる。住居の北東側がわずかに確認された程度で調査区外へ展開する。確認できた規模は1.16m×0.58m、床面までの深さは大きく削平されており、６cmほどである。遺物は鉢などが出土している。

24号住居（第4･8図 図版2）調査区の北東側で確認された。26・27号住居に切られる。平面形は方形を呈すると考えられ、確認できた規模は5.16m×2.44m＋α、床面までの深さは３cmである。主柱穴は２本で西側一辺にベッドを持つ。遺物は器台が出土した。遺物は器台が出土している。

26・29号住居（第5･8･20図 図版2･5･7）調査区の東側で確認された。26号住居が29号住居をいる。19・24号住居を切り、17・33・

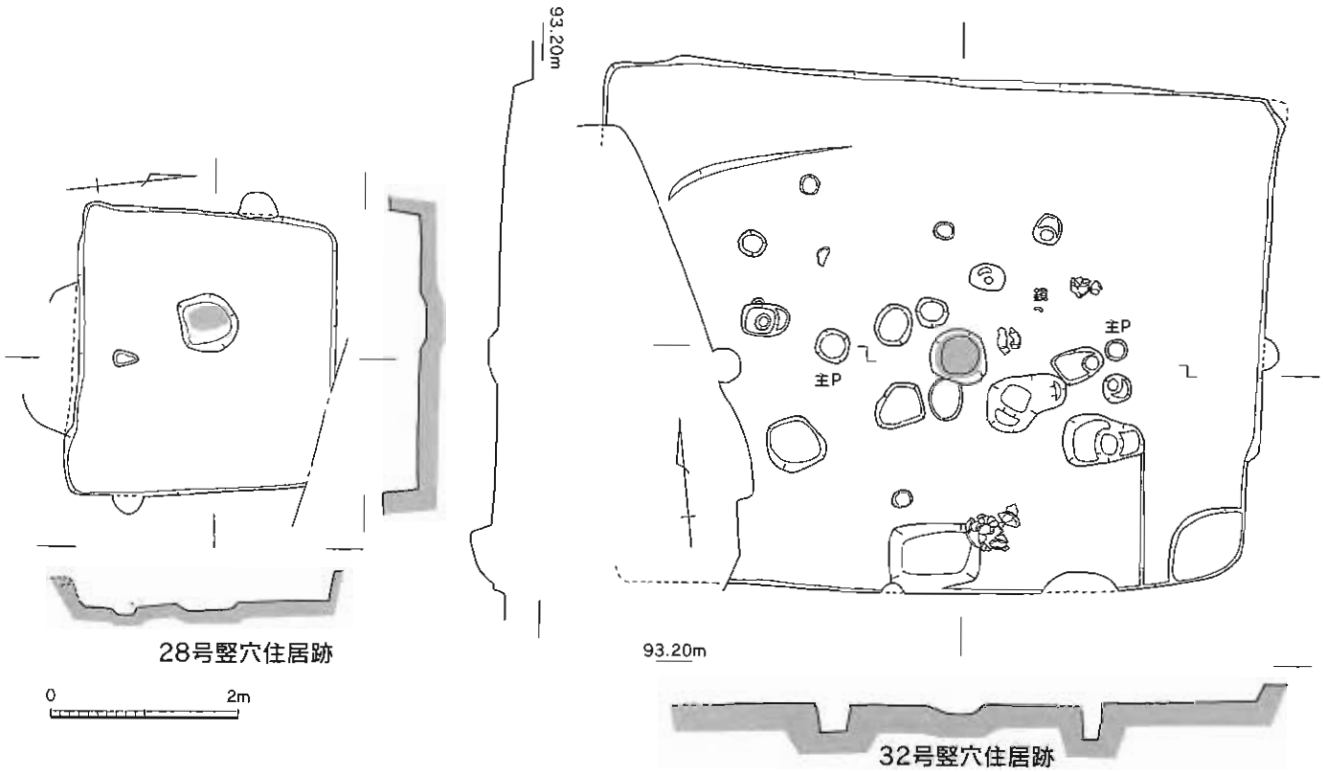


19号竪穴住居跡



26・29号竪穴住居跡

第５図　竪穴住居跡実測図（２）（1/80）



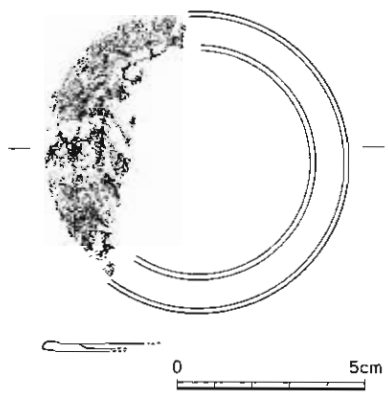
第６図　竪穴住居跡実測図（３）（1/80）

35号住居に切られる。26号住居は平面形は正方形を呈し、規模は7.33ｍ×6.82ｍ＋α、床面までの深さは29cmである。主柱穴は２本で、四周にベッドを作りつけている。29号竪穴住居は西側の一部が確認された程度で、確認できた規模は3.11ｍ＋α×1.11ｍ＋α、床面までの深さは13cmである。遺物は甕・壺、石庖丁、刀子などが出土している。

28号住居（第6･8･12図　図版2･7）調査区の北側で確認された。12号住居を切り、２号竪穴遺構に切られる。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は2.98m、2.81ｍ、床面までの深さは30cmである。中央に炉をもつが、主柱穴は確認できなかった。遺物は手捏ね土器・壺、石庖丁、磨製石斧などが出土している。

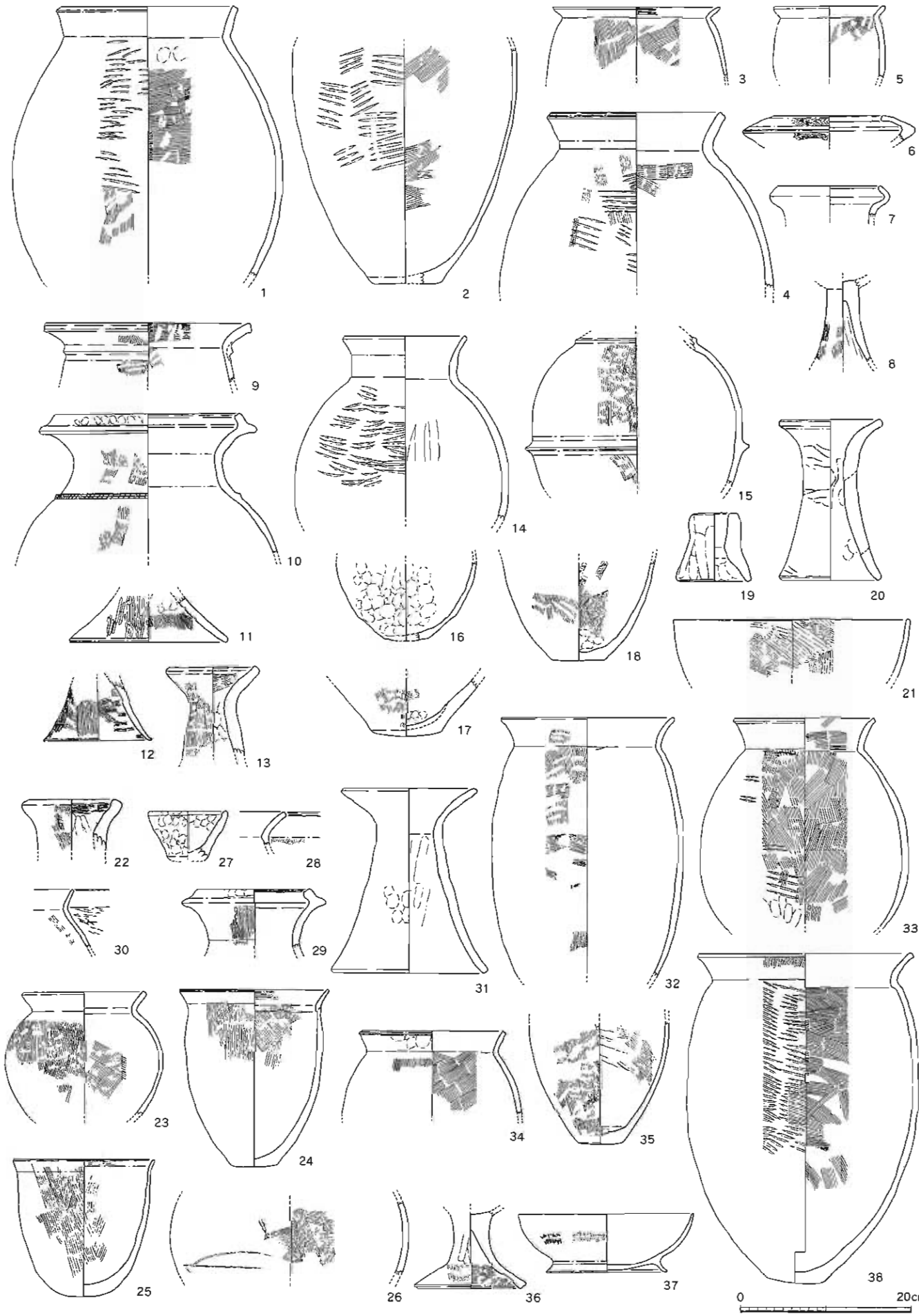
32号住居（第6～8･12･20図　図版1･2･5･7）調査区のほぼ中央で確認された。９・37・38号住居を切り、３号住居に切られる。平面形は長方形を呈し、規模は7.26ｍ×5.52ｍ、床面までの深さは36cmである。主柱穴は２本で、南面土坑、ならびに北西・南東隅にベッドが確認された。遺物は鏡片、甕、石庖丁・砥石などが出土している。
第７図は小型倣製鏡の破片である。風化が激しく、図文などは明確でない全体の2/5ほど残存しており、復元径は8.0cmである。

33号住居（第9･11～13図　図版2･5･7）調査区の中央南側で確認された。26・29号住居を切り、17号住居に切られる。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は6.00ｍ×6.05m、床面までの深さは35cmである。主柱穴は2本確認され、北側の一辺にベッドが見られ、南面土坑も確認された。遺物は甕・鉢、砥石などが出土した。

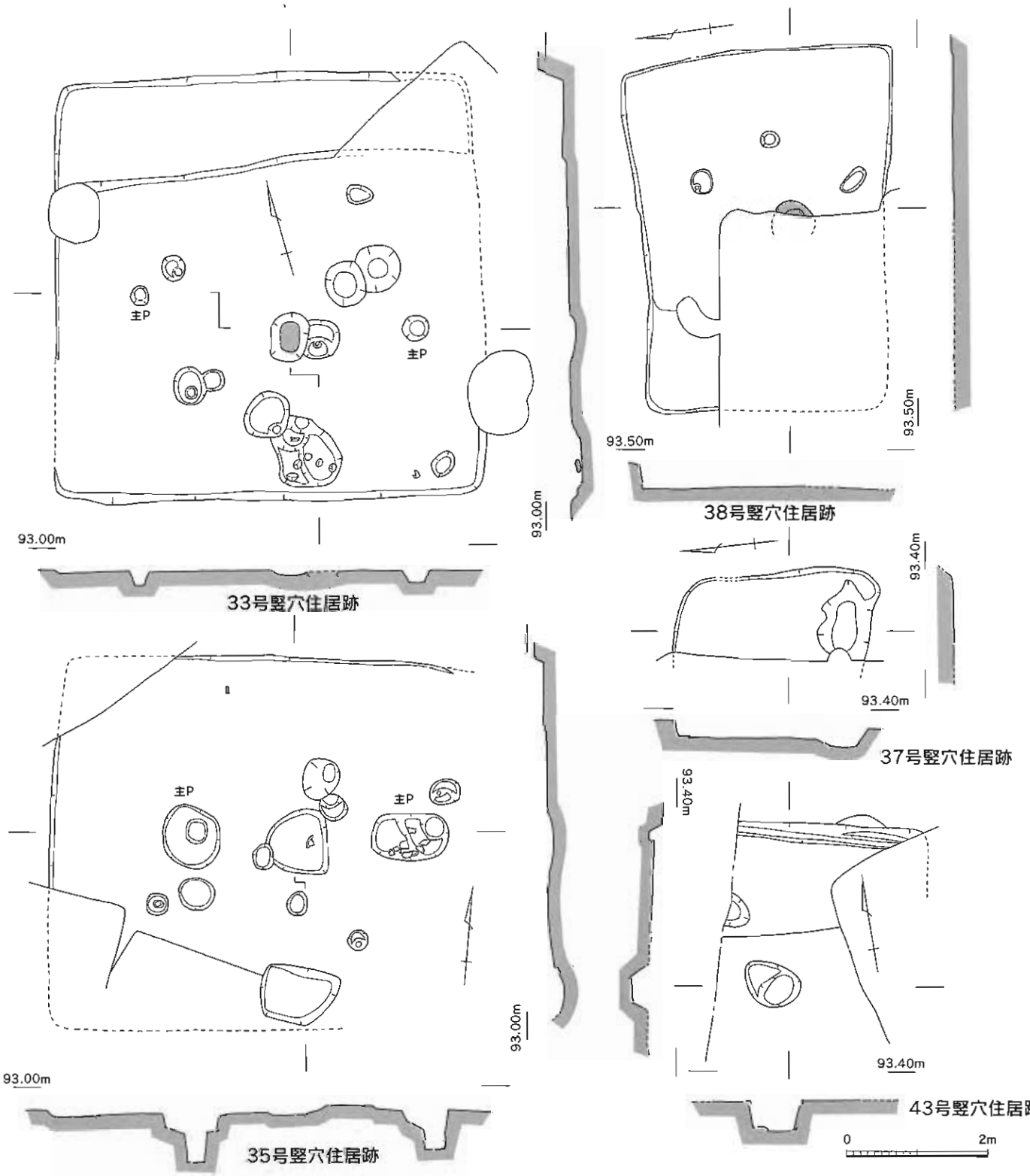


第７図　32号住居出土
仿製鏡片実測図（1/2）

写真１　32号住居仿製鏡片
出土状況



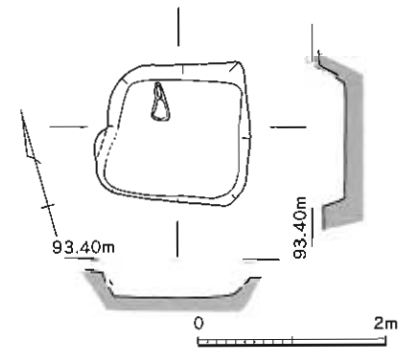
第８図　出土遺物実測図（１）（1/6）



第９図　竪穴住居跡実測図（４）（1/80）

35号住居（第9･11･12図　図版2･5･7）調査区の南東隅で確認された。平面形は長方形を呈し、東側は調査区外へ広がる。規模は5.20ｍ×5.25ｍ、床面までの深さは24cmである。主柱穴は２本で、南面土坑が確認された。ベッドはない。遺物は甕・高杯が出土している。

37号住居（第9･11図　図版2･5）調査区のほぼ中央で検出さ



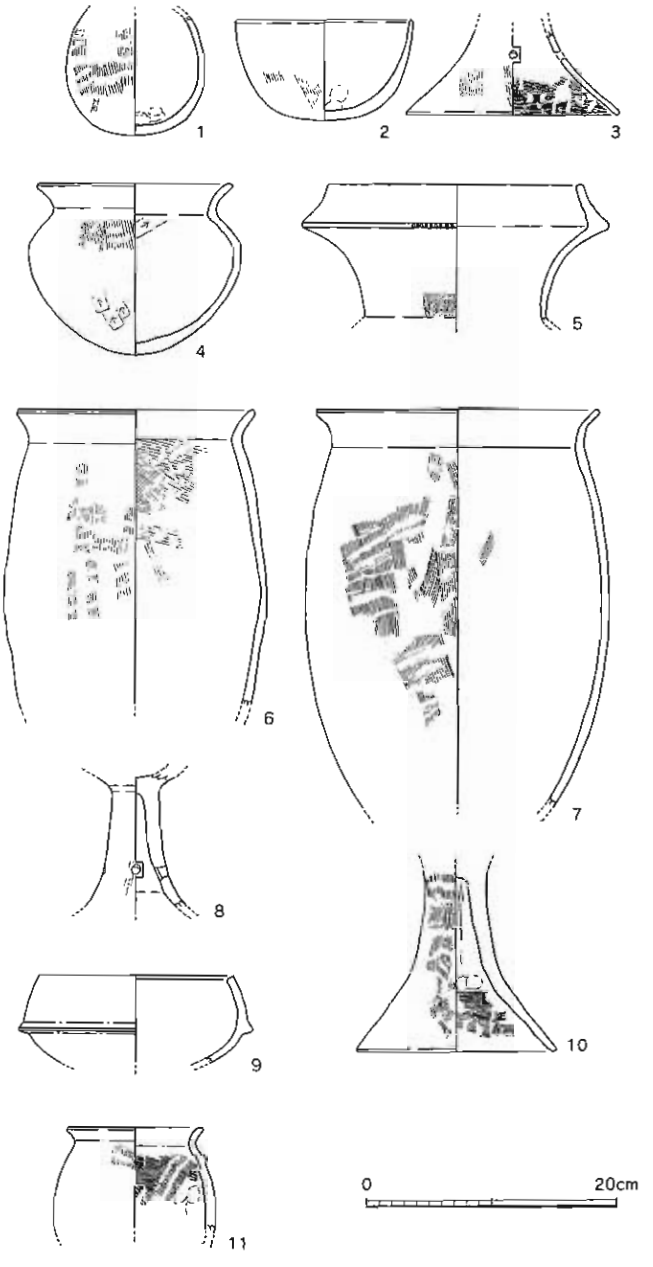
第10図　２号竪穴遺構実測図（1/80）

れた。9・12・38号住居を切り、32号竪穴住居に切られる。平面形は西側が32号住居により切られているが、方形を呈すると考えられる。規模は2.72m×1.46m、床面までの深さは26cmである。主柱穴・炉は確認されなかった。遺物は甕・高杯などが出土している。

38号住居（第9・11図　図版2）調査区の中央北側で検出された。9・10・12・32・37号住居に切られる。平面形は長方形を呈し、規模は5.03m×3.78m、床面までの深さは55cmである。主柱穴は2本、南面土坑が確認された。遺物は鉢が出土している。

43号住居（第9図　図版1）調査区の西端で検出された。2・3号住居に切られる。平面形は方形を呈すると思われ、規模は1.63m×2.42m、床面までの深さは16cmである。南側の一辺にベッドが確認されたが、炉・主柱穴は確認されなかった。

2号竪穴遺構（第9・11・20図　図版3・7）調査区の中央北側で確認された。28号住居を切る。平面形はほぼ正方形を呈する。規模は1.50m×1.45m、床面までの深さは27cmである。遺物は甕、砥石が出土している。



第11図　出土遺物実測図（2）（1/6）

（3）古墳時代～古代の遺構と遺物

この時期の遺構は住居24軒、竪穴遺構1基、掘立柱建物2棟、溝が1条確認された。このうち、住居は古墳時代後期初めから終末期にかけてのものが20軒、奈良時代のものが4軒確認された。また、掘立柱柱建物はこれらの住居を切って存在している。

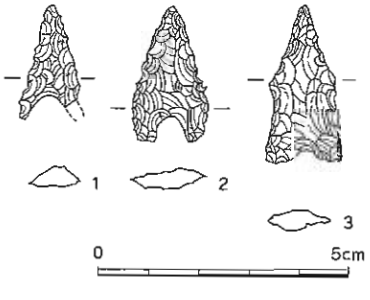
1号住居（第14・17・19図　図版3）調査区の西端で確認された。2・3号住居を切る。南側は削平を受けているため、平面形は定かではないが、長方形を呈すると思われ、規模は確認できた部分で3.35m×1.39m＋α、床面までの深さは7cmである。主柱穴・壁周溝は確認できなかった。カマドは北側壁面中央に付設されており、壁の外に張り出すタイプである。炊き口付近は赤く焼成していた。袖の間の幅は約45cm、奥壁の幅は約42cm、袖から奥壁までの長さは約45cmである。

※トーンは研磨面

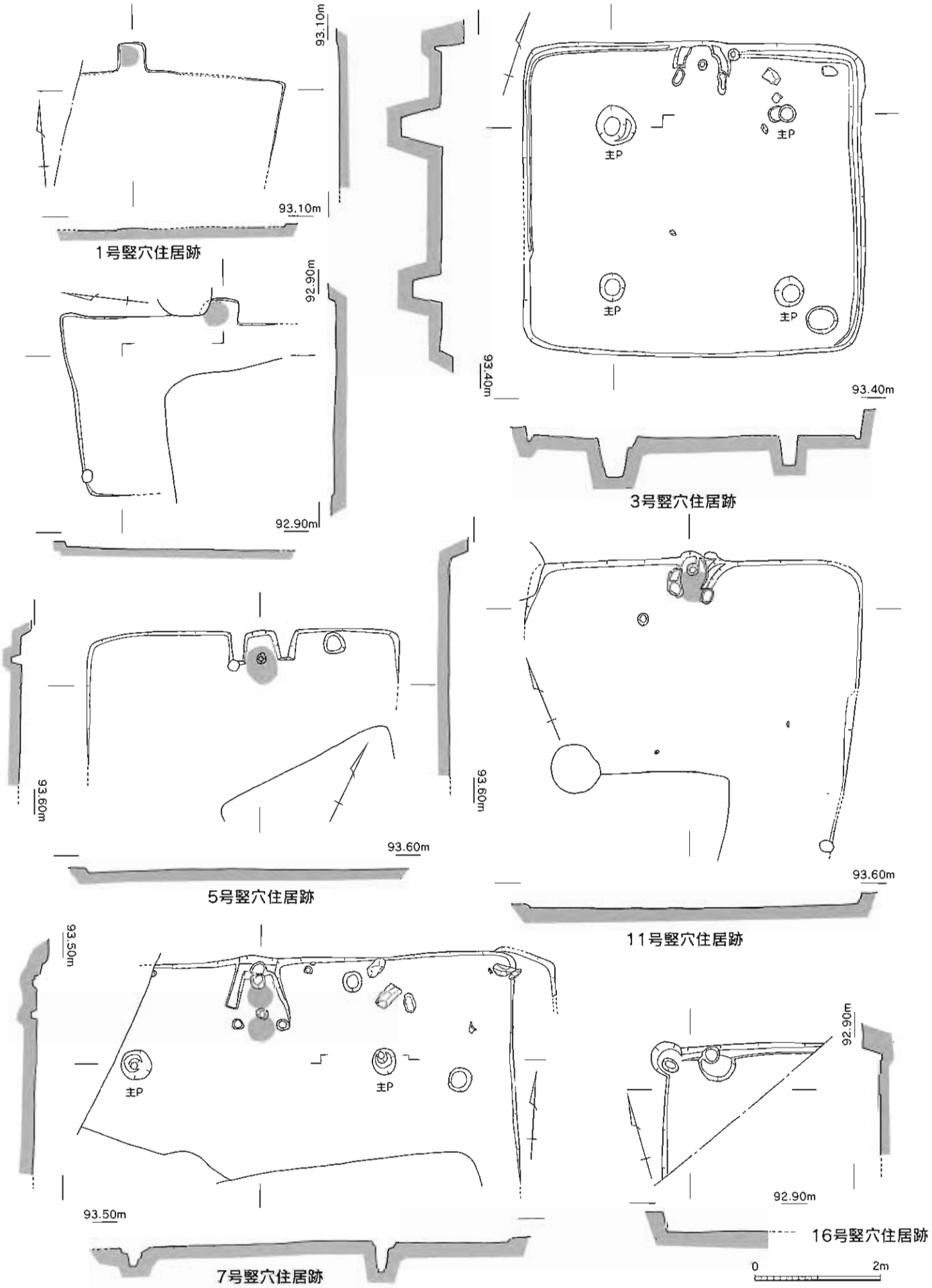
第12図　出土石器実測図（1）（1/3・1/2）

遺物は土師器甕・椀が出土している。

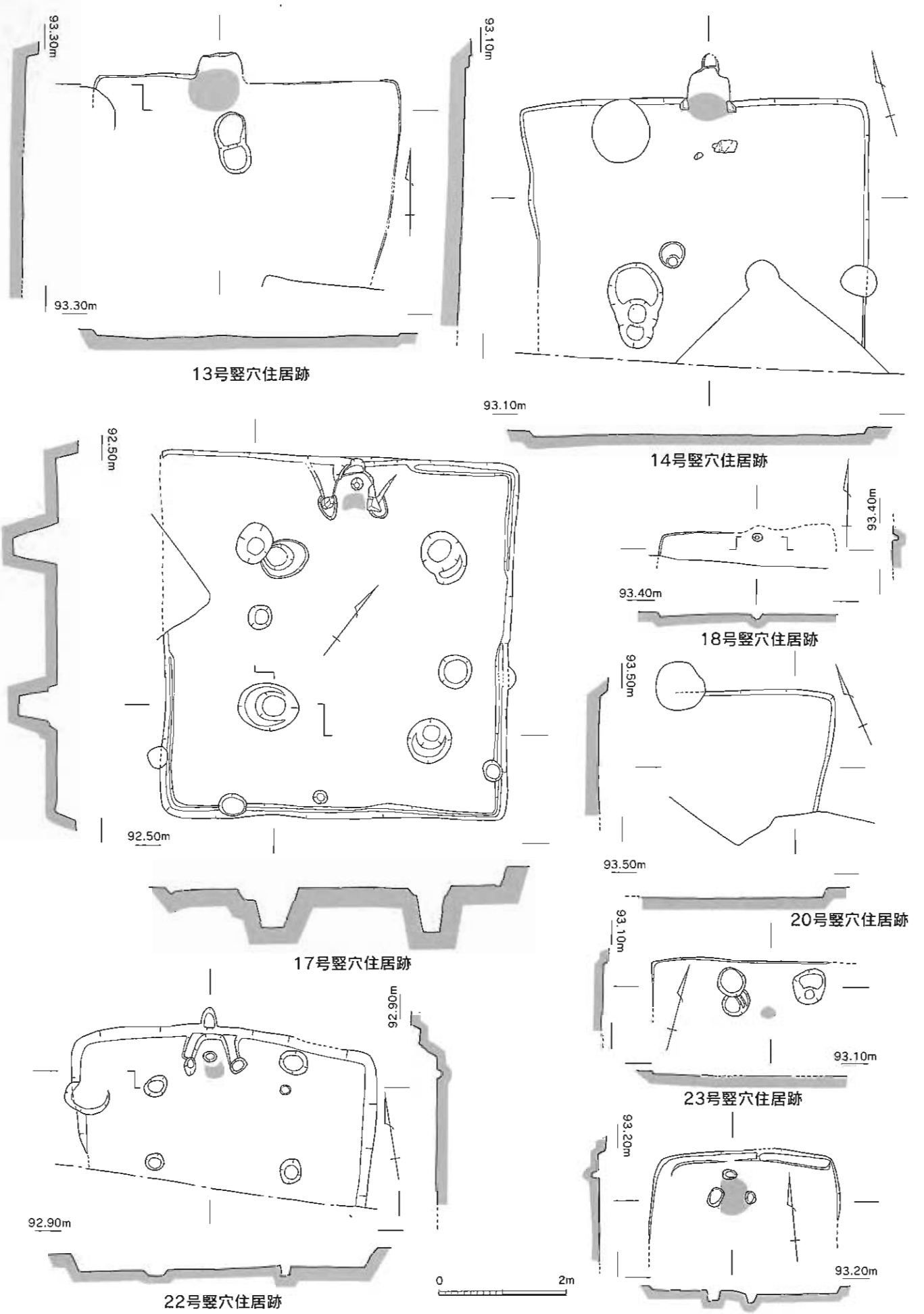
３号住居（第14･17･19･20図　図版3･6･7）調査区の西側で確認された。２・４・43号住居を切り、１号住居に切られる。平面形は方形を呈し、規模は5.38m×5.00m、床面までの深さは40cmである。主柱穴は４本確認され、壁周溝が西壁、北壁、東壁に巡る。カマドは北西壁中央に付設されており、外に張り



第13図　出土石器実測図（2）（2/3）



第14図　竪穴住居跡実測図（5）（1/80）



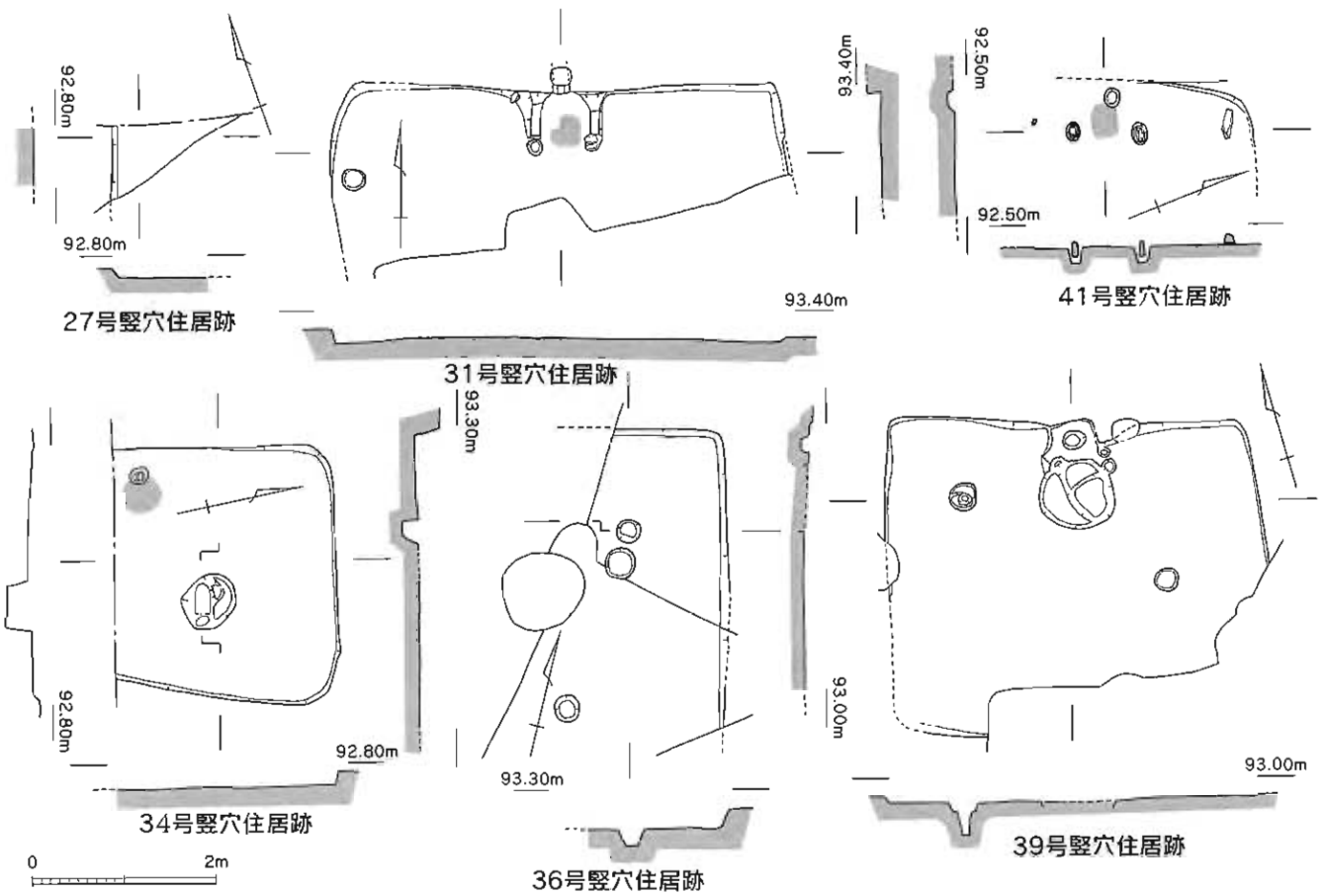
第15図　竪穴住居跡実測図（6）（1/80）

出さないタイプである。カマド袖間の幅は約75cm、奥壁幅は約30cm、袖から奥壁までの長さは約50cmである。カマドの周辺には廃棄時の祭祀に使用されたと考えられる土器が確認された。遺物は須恵器蓋杯、土師器甕、紡錘車が出土している。

４号住居（第14･17･19図　図版3）調査区の西側で確認された。３・５・７・11・20号住居を切り、２号掘立柱建物に切られる。南側が削平を受けているが、平面形は長方形を呈すると思われる。規模は現状で3.44m＋α×2.82m、床面までの深さは16cmである。カマドは東壁側に付設されており、袖間の幅は約55cm＋α、奥壁の幅は約45cm＋α、袖から奥壁までの長さは約40cmである。遺物は土師器甕が出土している。

５号住居（第14･17･19図　図版3）調査区の北西隅で確認された。８号住居を切り、７号住居に切られる。この７号住居によって南側が大きく削平されており、平面形は方形を呈すると思われ、規模は現状で4.93m×2.10m＋α、床面までの深さは14cmである。主柱穴は確認できなかったが、カマドが北壁中央に付設されており、外側には張り出していない。焚き口付近は赤く焼成していた。また、カマドの袖間の幅は約50cm、カマド奥壁の幅は約35cm、袖から奥壁までの長さは約45cmである。遺物は須恵器高杯、紡錘車などが出土している。

６・７号住居（第14･17･19･20図　図版3･6･7）調査区の北西隅で確認された。５・８号住居を切り、３・４号住居に切られる。この住居も大きく削平を受けているが、平面形は方形を呈すると考えられ、規模は現状で6.33m＋α×3.44m＋α、床面までの深さは21cmである。主柱穴は２本確認されており、その位置から４本と考えられる。カマドは北壁中央に付設され、壁の外側に



第16図　竪穴住居跡実測図（７）（1/80）

は張り出していない。袖の内側には焼成面が見られ、袖間の幅は約85cm、カマド奥壁の幅は約40cm、袖から奥壁までの長さは60cmである。遺物は須恵器蓋杯、土師器甕などが出土している。

11号住居（第14·17·19図　図版3·6）調査区の北側で確認された。4・20号住居、2号建物に切られる。南側が削平を受けているが、平面形は方形を呈すると考えられ、規模は現状で5.34m×4.40m＋α、床面までの深さは32cmである。主柱穴は確認できなかった。カマドは北壁中央に付設され、壁の外側には張り出していない。カマドは左側の袖が削平を受けており、袖石の抜き取り痕と思われるものが確認できた。それから推定すれば、袖間の幅は約70cm、奥壁の幅は約50cm、袖から奥壁までの長さは約80cmである。遺物は須恵器杯蓋・無蓋高杯などが出土している。

13号住居（第15·17·19図　図版3）調査区のほぼ中央で確認された。31・39号住居を切り、14号住居、1号掘立柱建物に切られる。南側は削平のため、ほとんど残存していないが、平面形は方形を呈すると思われる。規模は現状で4.78m×2.94m＋α、床面までの深さは13cmである。主柱穴は確認されなかった。カマドは北壁中央に付設され、袖部分から壁の外側に張り出すタイプである。袖間の幅は約70cm、奥壁の幅は約60cm、袖から奥壁までの長さは約45cmである。遺物は須恵器高杯、土師器甕が出土している。

14号住居（第15·17·19図　図版3）調査区の中央南側で確認された。13・17号住居を切り、16号住居・1号掘立柱建物に切られる。南側は削平を受けているが、平面形は方形を呈すると思われ、その規模は5.34m×4.15m＋α、床面までの深さは23cmである。主柱穴は確認されなかった。カマドは北壁中央に付設され、袖部分から外側に張り出すタイプで、煙道が確認された。袖間の幅は約80cm、奥壁の幅は約65cm、袖から奥壁までの長さは約70cmで、煙道は長さ約20cm、幅約25cmである。遺物は須恵器蓋・杯身などが出土している。

16号住居（第14図　図版3）調査区の中央南側で確認された。14号住居を切る。南側は調査区外へ展開するが平面形は方形を呈すると思われる。現状での規模は1.75m＋α×1.85m＋α、床面までの深さは　cmである。主柱穴、カマドは確認されなかった。遺物は須恵器・土師器の小破片が出土した程度である。

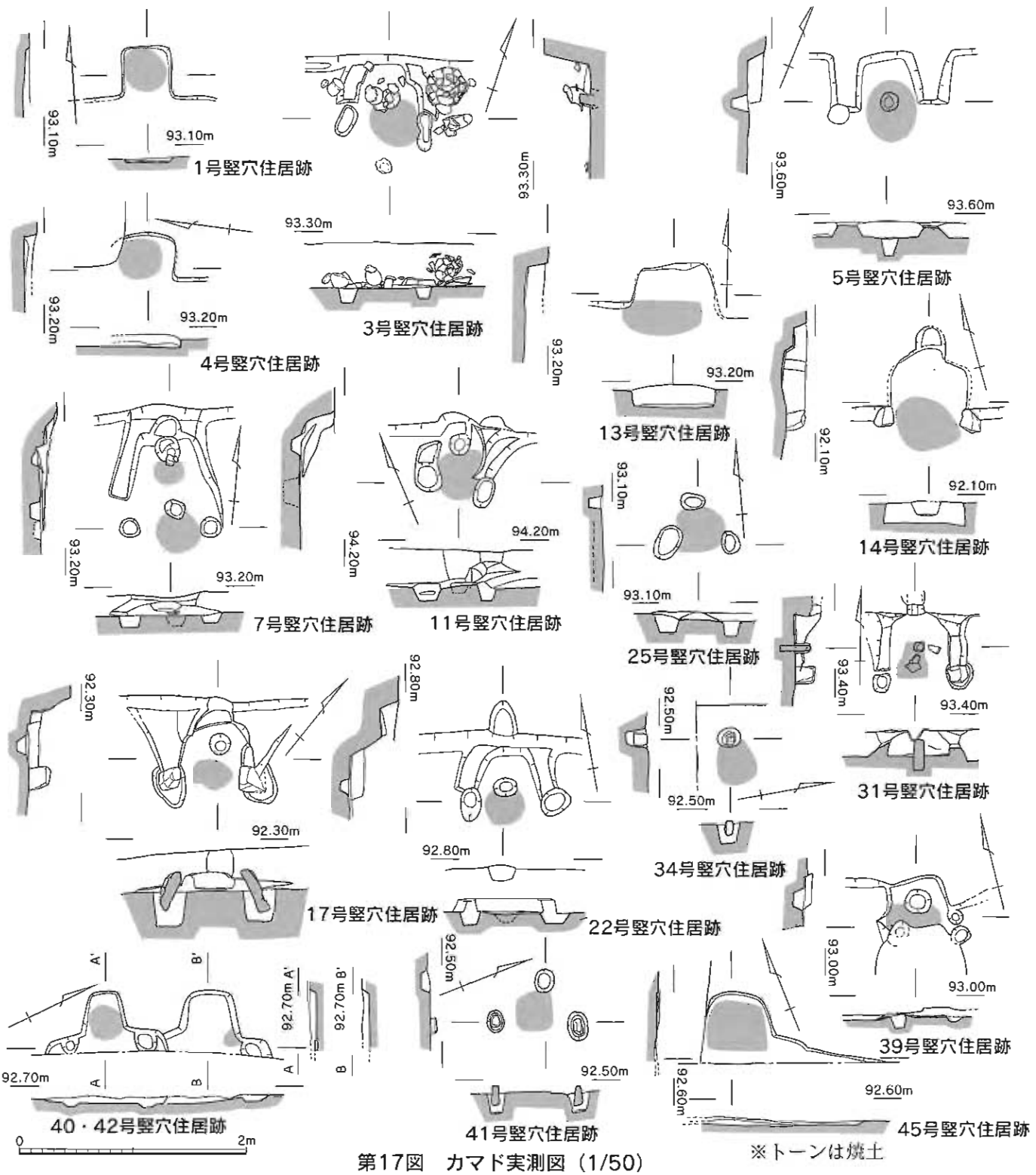
17号住居（第15·17·19·20図　図版4·6）調査区のほぼ中央で確認された。26・33・35・36・39号住居を切り、14号住居に切られる。平面形はほぼ正方形を呈し、その規模は5.43m×5.68m、床面までの深さは37cmである主柱穴は4本確認され、壁周溝がほぼ全周する。カマドは北西壁中央に付設され、外には張り出さないタイプである。袖間の幅は約75cm、奥壁の幅は約40cm、袖から奥壁までの距離は約55cmである。遺物は須恵器杯蓋、土師器高杯、鉄鏃などが出土している。

18号住居（第15·19図）調査区の中央北側で確認された。26号住居を切る。この住居跡はほとんどが削平を受けており、北側と西側の壁の一部が確認されたのみである。平面形はおそらく方形を呈すると考えられ、その規模は現状で2.79m＋α×0.37m＋α、床面までの深さは5cmである。北側壁のコーナー部分から約1.5mの位置にカマドが付設されており、わずかに壁の外に張り出すタイプである。焼成面と袖、支脚の抜き取り痕が確認されたが、袖は確認できず、削平を受けていると考えられる。遺物は土師器甕が出土している。

20号住居（第15·19図）調査区の西側で確認された。11号住居を切り、4号住居・2号掘立柱建物に切られる。南側は削平を受けているが、平面形は方形を呈すると思われる。現状での規模は2.06m＋α×2.42m＋α、床面までの深さは16cmである。主柱穴・壁周溝・カマドなどが確認

されなかった。遺物は土師器甕が出土している。

22号住居（第15･17･19図　図版4）調査区の南端で確認された。15号住居・１号溝を切り、１号掘立柱建物に切られる。住居の南側は調査区外へ展開しするが、平面形は方形を呈すると考えられる。調査区内での規模は4.81ｍ×2.51ｍ＋α、床面までの深さは40cmである。主柱穴は２本確認でき、調査区外へ展開し、４本柱になると考えられる。壁周溝は確認されなかった。カマドは北壁中央に付設され、煙道が外に張り出すタイプである。袖間の幅は約75cm、奥壁の幅は約40cm、



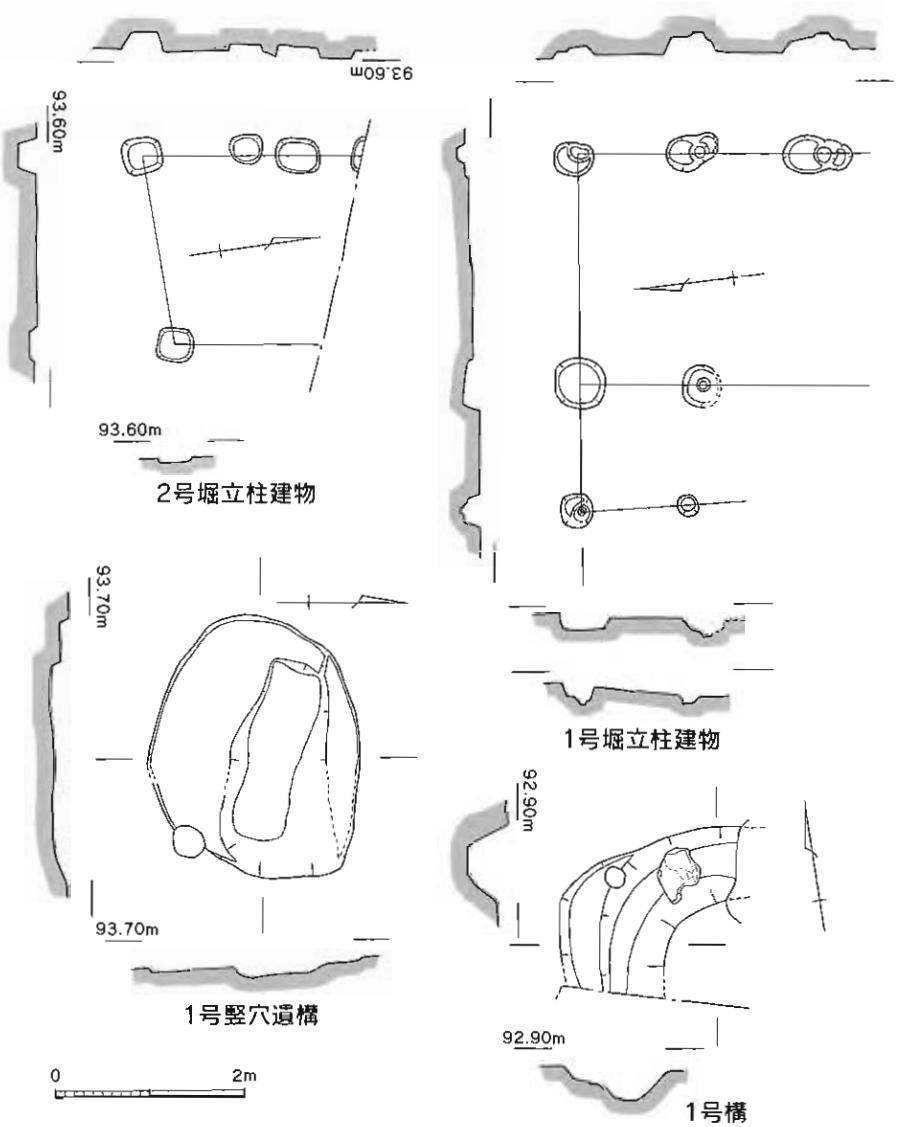
第17図　カマド実測図（1/50）

※トーンは焼土

袖から奥壁までの長さは約50cmである。遺物は須恵器杯身・甕、土師器甕などが出土している。

23号住居（第15図　図版4）調査区の東側で確認された。19・25・26号住居を切る。この住居も大部分が削平されており、北側と西側のコーナー部分が残る程度である。平面形は方形を呈すると思われる。規模は現状で2.20m＋α×1.10m＋α、床面までの深さは13cmである。主柱穴・壁周溝は確認されず、カマドの焼成面がわずかに検出できた。遺物は土師器片が出土している。

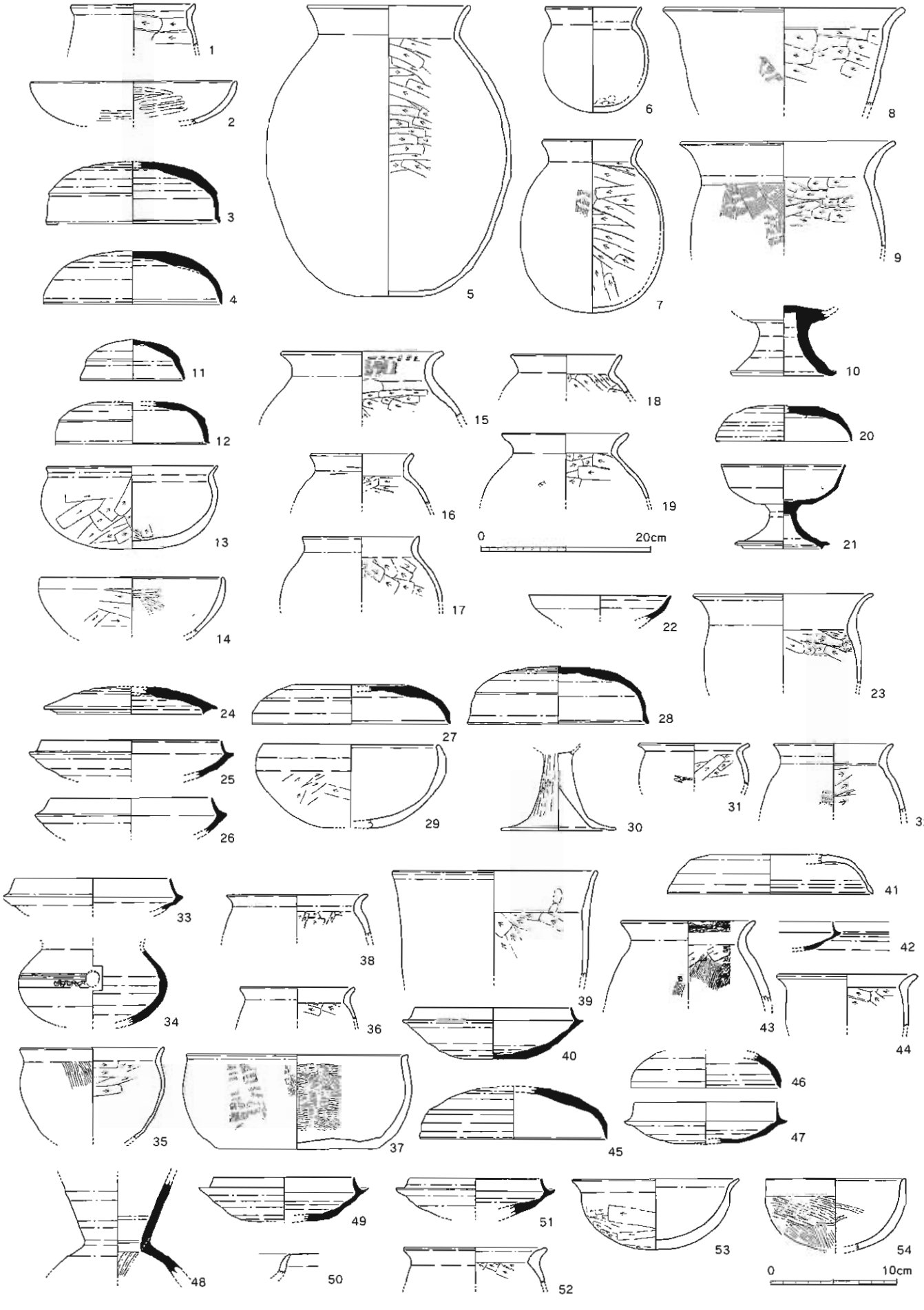
25号住居（第15・19図　図版6）調査区の東端で確認された。19号住居を切り、23号住居に切られる。南側は削平を受けており、平面形は方形を呈すると考えられる。現状での規模は2.98m×1.50m＋α、床面までの深さは10cmである。主柱穴・壁周溝は確認されなかった。カマドは北壁中央に付設され、外に張り出さないタイプである。袖は確認できず、袖石と支脚の抜き取り痕が確認され、その間に焼成面が検出された。袖間の幅は約55cmである。遺物は土師器甕・鉢が出土している。



第18図　1・2号掘立柱建物・1号竪穴遺構・1号溝実測図（1/80）

27号住居（第16・19図）調査区の東側北端で確認された。24号住居を切る。壁の西壁の一部しか確認できず、平面形・規模は不明である。床面までの深さは8cmである。遺物は土師器甕が出土している。

31号住居（第16・17・19図　図版4・6）調査区の中央付近で確認された。32・36号住居を切り、13号住居・1号掘立柱建物に切られる。この住居は南側を切られているが、平面形は方形を呈すると思われ、現状での規模は4.94m×1.22m＋α、床面までの深さは22cmである。主柱穴・壁周溝は確認されなかった。カマドは北壁中央に付設され、外側に張り出さないタイプである。右側袖の袖石、支脚が確認できた。袖間の幅は約70cm、奥壁の幅は約45cm、袖から奥壁までの長さは

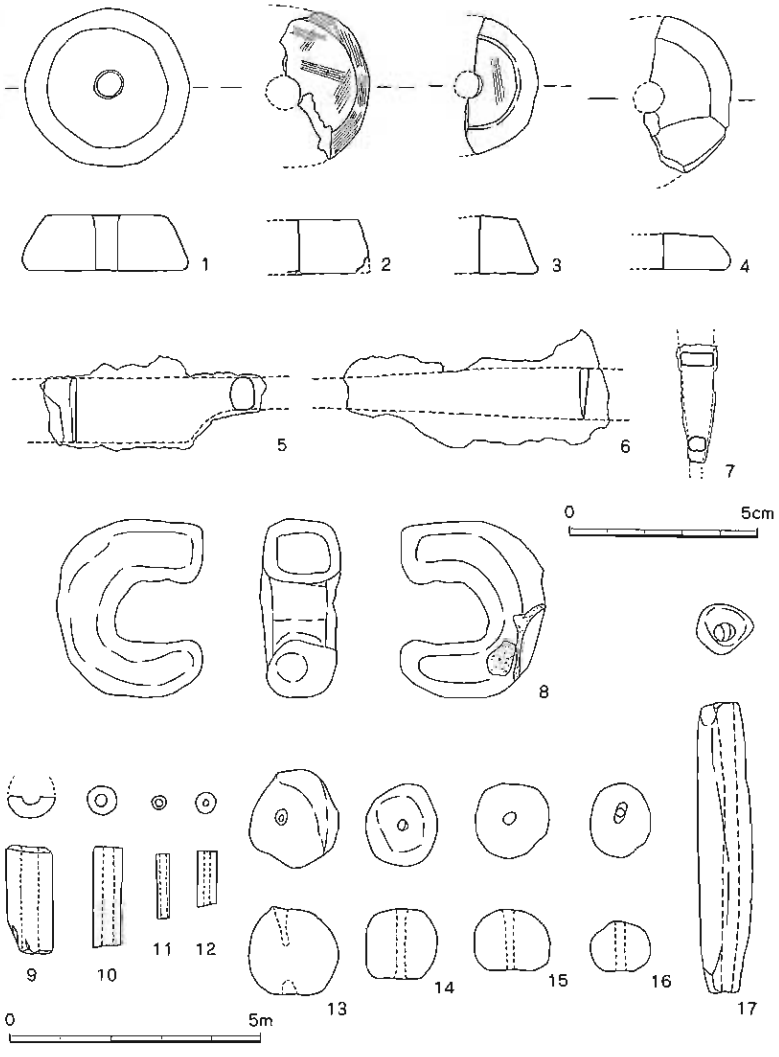


第19図　出土土器実測図（3）（1/4・1/6）

約65cmである。遺物は須恵器杯身、土師器甑などが出土した。遺物は須恵器杯身、土師器甑が出土している。

34号住居（第16・17図　図版4）調査区の南西側で確認された。35・41号住居を切る。住居の南側は調査区外へ展開し、平面形は長方形を呈すると思われる。検出部分での規模は2.40m＋α×2.72m、床面までの深さは18cmである。主柱穴・壁周溝は確認できなかった。カマドは西壁の調査区壁際で確認され、北西隅のコーナー部分からの距離は約1.8mである。カマドは外に張り出さないタイプで支脚と焼成面が検出された。遺物は出土しなかった。

36号住居（第16・17・19図　図版4）調査区のほぼ中央で確認された。13・17・31・39号住居に切られる。北側のコーナー部分のみの検出であり、平面形は方形を呈すると思われる。現状での規模は3.67m＋α×2.96m＋α、床面までの深さは26cmである。主柱穴は1本のみ確認できたが、その位置から4本柱と考えられる。壁周溝・カマドは確認できなかった。遺物は須恵器杯身、土師器蓋・甕などが出土している。



第20図　出土石製品・鉄器・玉類実測図（1/2・2/3）

39号住居（第16・17・19図　図版4・7）調査区のほぼ中央、13号住居の東側で確認された。36号住居を切り、13号住居・1号掘立柱建物に切られる。この住居は北壁と東壁のみ確認され、平面形は方形を呈すると思われる。現状での規模は4.08m＋α×3.46m＋α、床面までの深さは8cmである。主柱穴・壁周溝は確認できなかったが、カマドは北東隅のコーナー部分から西に約1.8mで一部が確認された。袖部分から外に張り出すタイプで、袖から奥壁までの長さは約40cmである。遺物は須恵器杯身・杯蓋が出土した。

40・42号住居（第17・19図）調査区の東端で確認された。両住居跡ともにカマドのみの検出で、40号住居が42号住居を切る。カマドはともに壁の外に張り出すタイプで、袖石の抜き取り痕が確認された。40号のカマドは袖間の幅が約65cm、奥壁の幅が約25cm、袖から奥壁までの長さは約45cmである。また、42号は北側の袖石の抜き取り痕のみ検出できた。カマド奥壁の幅は約35cm、

袖から奥壁までの長さは約50cmである。遺物は土師器高杯が出土している。

41号住居（第16·17·19図　図版4·6）調査区の南東端で確認され、34号住居に切られる。床面が検出されたのみである。カマドは西側で確認され、袖石と支脚の抜き取り痕が確認された。袖間の幅は約75cmである。遺物は須恵器杯身・長頸壺が出土した。

45号住居（第17図）調査区の中央南端、22号住居の東側で確認された。カマドのみの検出である。壁の外側に張り出すタイプである。袖石や支脚は確認できなかったが、焼成面は検出された。カマドの奥壁の幅は約45cm、袖から奥壁までの長さは約65cmである。遺物は出土しなかった。

１号竪穴（第18·19図　図版4）調査区の中央北端、11号住居の東側で確認された。平面形は不整円形で、規模は長軸2.78m、短軸2.24m、床面までの深さは22cmである。遺物は須恵器杯身、土師器甕が出土している。

１号建物（第18図　図版1）調査区の中央南側で確認された。13・14・22・39・45号住居を切る。南側は調査区外へ展開する。２間×２間＋αの建物で、主軸をN－7°－Eに測る。その規模は梁行3.84m×桁行2.72m＋α、柱穴の深さは８cm～20cmである。遺物は黒色土器などが出土している。

２号建物（第18図　図版１）調査区の北側、11号住居を切る形で検出された。この建物は他に４・20号住居を切る。建物の北側は調査区外へ展開し、１間×２間以上の建物になると考えられ、主軸をN－6°－Eに測る。規模は梁行2.08m×桁行2.40m、柱穴の深さは８cm～20cmである。遺物は青磁碗などが出土している。

１号溝（第18·19図　図版4·6）調査区の南西側、22号住居の西側で検出された。溝はこの22号住居に切られ、21号住居を切る。南側は調査区外へ展開する。今回検出した溝は、南側から伸びてきた溝が調査区の壁から約１mで東側へ折れるコーナー部分にあたる。遺物は土師器椀などが出土している。

Ⅳ　まとめ

（１）弥生時代の遺構と遺物について

ここではポイントとなるいくつかの住居の時期を検討し、切り合い関係からその前後関係を考えていきたい。まず、この時期の遺構の中で古い要素をもつ遺物としては12号住居出土の高杯が挙げられる。裾が緩やかに外反している点から後期中頃に位置付けられる。これから38号住居の時期はさかのぼるが、後期中頃の範疇で捉えることができよう。

一方、これらの遺構の切り合い関係の中で最も新しいものは15・32・33・35号住居がある。これらの住居から出土した土器をみてみると、32・35号住居の甕は最大径が胴部中位にあり、口縁部はやや外反しながら立ち上がっていることから、後期終末に位置付けられる。また、35号住居の小型甕・二重口縁壺、15号住居の壺も同様の時期と考えることができる。

26号住居についてみてみると、平面上では33·35号住居に切られるようにとなっているが、遺物をみると26号住居出土の甕は口縁部がほぼ直線的に立ち上がり、胴部の張りも少なく柳田氏[11]のＩＡ期にあたる。また、住居の構造は三辺にベッドを持ち、主柱穴も４本ある。ベッドを一辺にしか作らない33号住や33·35号住ともに主柱穴が２本である点と比較しても、26号住居が33・35号住居より新しい要素を持っている。これは地形が南に向かって傾斜しており、南側が削平を受け、

一見平面上で26号住居が切られるようになっていると思われる。こうした点から26号住居がこの時期の住居としては最も新しく、後期終末と考えられる。こうした遺構の切り合い関係から、この時期の遺構の前後関係は以下のようになると考えられる。

後期中頃	後期後半	後期終末
38住 →	12住 →	28住 → 2堅
	→ 10住 → (9住) →	37住 → 32住
	19住・24住・29住 →	→ 33住・35住 → 26住
		15住 →
	(43住) → 2住　8住・	21住

（　）は推定時期

住居の規模をみてみると最も古い12号住居は一辺が２ｍ前後しかないのに対して、新しい時期の住居は一辺が６～８ｍと規模が大きくなり、概ね小型から大型への流れが看取できる。

以上のことから、本遺跡における弥生時代後期の住居群は中頃～終末の時期で捉えることができる。もっとも後期中頃は住居の数も少なく、後期後半～終末にかけて一気に増加し、古墳時代に入り、衰退したと考えることができる。

（２）古墳時代～古代の遺構と遺物について

前節と同様に住居の時期を検討し、切り合い関係からその前後関係を考えていきたい。まず、この時期の遺構の中で最も古いのは５号住居であろう。この住居出土の須恵器高杯は脚部が太く、その端部のつくりから陶邑編年[2)]のTK47～MT15（５世紀後半～６世紀初頭）と考えられる。それに続く、３号住居が須恵器杯蓋の口縁端部の形態からMT15～TK10、土師器甕は口縁部形態から重藤編年の８期（６世紀前半～中頃）にあたる。また７号住居は須恵器杯蓋がやや古い形態を示すものの、土師器椀や甕の口縁部形態が重藤編年９期[3)]（６世紀後半頃）と考えられる。また、14号住居出土の遺物は古い要素をもつ須恵器杯身があるものの、蓋の形態から７世紀後半頃と考えられる。一方、最も新しい時期の住居としては、４号住居が挙げられる。カマドの形態が外に張り出していることや出土した土師器甕の口縁部と胴部形態から８世紀後半頃のものと思われる。また、１・13号住居もカマドの形態から８世紀代と考えることができる。

平面的にはこの４号住居は３号住居に切られているが、カマドの形態や出土遺物からみても明らかに３号住居より時期が下る。これは前述した26号住居と33･35号住居と同様に検出面から深さが浅いことや地形の傾斜から削平を受けたものと考えることができる。13号住居と39号住居、22号住居と45号住居もこれと同様の切り合い関係にあるとみられる。以上のことから、これらの以降の前後関係は以下のようになると考えられる。

6世紀			7世紀			8世紀			…	12世紀
前半	中頃	後半	前半	中頃	後半	前半	中頃	後半		
5住 →		(6住) →	7住 →				→	4住 →	→	2建
	3住 →						→	1住		
		11住 →					→	20住 →		
	36住 →	17・31住 →	39住 →	13住 →	14住 →		→	16住 →	→	1建
		25住 →	23住							
	1溝 →	22住 →	(45住)							
		(34住)・1里・41住	42住 →	40住						

（　）は推定時期

このように、当該期の住居は６世紀初頭～12世紀の比較的長い期間にわたって、作られている。この中でも特に６世紀中頃～後半にかけての時期に最も住居が多く作られる。また、７世紀代の集落が確認されたことも市内では数少ない例である。

住居規模の点からみてみると６世紀前半の住居は一辺５～６ｍあるが、中頃以降の規模は一辺の長さが５ｍを超えるものは、14号住居を除いては見られず、基本的には縮小化の方向性が指摘できる。カマドについては、その作り付け位置が４･34･41号住居を除いては、北から北西方向の軸の中に入っている。また、カマドが住居の外に張り出すタイプと張り出さないタイプが見られるが、これは時期が下るにつれ、外に張り出す傾向が見られる。これは住居規模の縮小化に伴うが、住居内空間の減少による外への張り出しという一般的な見解と同様の現象と指摘できる。

（３）本村遺跡の性格について

弥生時代後期後半～古墳時代初頭における周辺台地との関係　本村遺跡に北西にある小迫辻原遺跡では弥生時代後期終末に大規模な環濠集落が３基形成される。これらの環濠は新しくなるにつれ、幅が広くなり、土塁も築かれており、また環濠の内と外で同時期の住居が存在することから、社会的な階層分化がより進んだものとしてみることができる。そのような時期に本村遺跡において集落が形成される。一方、遺跡北東部の台地上にある草場第二遺跡[4]では、弥生時代後期後半から古墳時代中期にかけての墓地が確認された。この墓地群の造営開始時期は本村遺跡で集落形成が開始とほぼ同時期である。また、本村遺跡南側の台地上にある吹上遺跡でも同時期の集落が確認されているが、吹上遺跡の場合、集落と墓地が並存する形で存在している。

そうした状況と地理的な位置関係から、それぞれの集落や墓地の形成開始時期に若干の差異はあるが、小迫辻原遺跡[5]、本村遺跡の墓地群として、草場第二遺跡が位置付けられる可能性が高く、小迫辻原遺跡・本村遺跡の居住者が埋葬されたと考えられる。

また32号住居からは鏡片が出土しており、この時期の鏡の出土例は市内では５例目である。このうちの３例は小迫辻原遺跡・草場遺跡・草場第二遺跡と、本遺跡周辺で出土している。小迫辻原遺跡では住居から、草場第二遺跡でも副葬されていたとみられる鏡が表採されている。またこの住居からは玉類も出土し、さらに26号住居からは勾玉も出土していることから、これらの住居が後期終末において集落の中心的位置にある、住居だったのではないだろうか。

その後、小迫辻原遺跡では古墳時代前期初頭に環濠居館が作られる。本村遺跡ではその時期には集落は廃絶している。この時期は尾部田遺跡[6]で集落が作られる時期にあたり、小迫辻原遺跡の集団との関係の深い集団が、尾部田遺跡周辺に居住したと考えられる。

住居から出土した土器は在地系のもの大半を占めるが、一部外来系も見受けられる。2･8･19号住居（第８図１・４・14）を中心として出土している。しかし、尾部田遺跡のように外来系が大半をしめるような住居はない。また、この集落の中心的な住居と考えられる32号住居は在地系で占められていることから、一般集落の土器群に外来系が大量に入ってくるのは、尾部田遺跡の集落形成時期の古墳時代前期初頭以降のことと考えられる。

古墳時代後期における集落再形成の要因　本村遺跡では古墳時代前期初頭以降、一旦集落が断絶する。その後、古墳時代後期になって再び集落が営まれる。この時期は盆地内においても集落形成が活発になる時期である。集落は本遺跡のように台地裾部に立地するのに加え、丘陵に挟まれた谷部にも多くの集落がみられる。この時期の盆地内における集落分布を見た場合、調査例の差にもよるが、盆地東部や三隈川を挟んだ南部に多く見られる。一方で本村遺跡を取り巻く、辻原台地や吹上原台地の周辺での例は少ない。吹上原台地・朝日ヶ丘と花月川に挟まれた狭い沖積地にある今泉

遺跡で当該期の集落が確認されている程度である。前述したように調査例の多寡にもよると思われるが、こうした状況から考えると唯一、本村遺跡一帯に大規模な集落が存在していることになる。本村遺跡が位置するのは辻原台地と吹上原台地に挟まれた谷状の地形になるが、この谷に沿って北西方向に進めば、朝日天神山古墳群[7]が築造されている宮原台地の南に突き当たる。朝日天神山古墳群は５次にわたる調査で６世紀前半から中頃にかけての築造され、大和王権との深い関わりの中で成立したと考えられている。この古墳群が宮原台地の南縁辺部に位置し、眼下の谷を見渡す絶好の位置にあることはから、この谷が情報伝達のルートの１つになっていたと考えられる。本村遺跡はその谷の東側にあり、ここから盆地の中心部を抜け、有田川沿いに東へ向かうルー上の重要な位置にあった拠点的な集落であったのではないだろうか。その後、８～12世紀にかけて集落の規模は縮小しているものの、継続的に集落が営まれているのは、盆地内でも少ない例といえよう。

註

1）柳田康雄「三･四世紀の土器と鏡－「伊都」の土器からみた北部九州－」『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集』1982

2）田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』研究論集第10号　平安学園考古クラブ1966

3）重藤輝行「仁衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」吉田東明編『仁衛門畑遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第12集　福岡県教育委員会　2000

4）高橋徹編『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（1）大分県教育委員会　1989

5）田中裕介・土居和幸ほか編『小迫辻原遺跡ⅠA・B・C-D区編』九州横断自動車建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書　10 他

6）行時志郎編『日田条里上手地区Ⅲ　高瀬条里永平寺地区　尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書　第34集　日田市教育委員会　2001

7）平成９～14年度に日田市教育委員会・別府大学が調査。

第1表　出土土器観察表（1）

挿図番号	遺構名	種別	器種	口径	胴部径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
第8図1	2住	弥生	甕	(21.2)	(31.8)	-	(32.0)	ハケ・ナデ・タタキ	ハケ・ナデ・指押さえ	ABCDE	良好	暗赤褐色	淡褐色	
第8図2	2住	弥生	甕	-	26.4	(7.2)	(27.8)	ナデ・タタキ	ハケ	ACE	良好	暗黄褐色	黄褐色	
第8図3	8住	弥生	甕	(19.6)	-	-	(8.2)	ハケ	ハケ・ナデ	ACDE	良好	暗褐色	淡褐色	
第8図4	8住	弥生	甕	(20.8)	(32.2)	-	(21.1)	ハケ　タタキ	ハケ・ナデ	CDE	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第8図5	8住	弥生	甕	(13.2)	(13.2)	-	(8.4)	ハケ？・ナデ	ハケ・ナデ	BCD	やや不良	淡赤褐色	淡褐色	
第8図6	10住	弥生	壺	(12.8)	-	-	(3.2)	ハケ　ナデ	ナデ	ABCE	良好	赤褐色	赤褐色	
第8図7	10住	弥生	器台	(12.0)	-	-	(3.7)	ナデ	ナデ	ABCD	やや不良	黄褐色	黄褐色	
第8図8	12住	弥生	高杯	-	-	-	(9.8)	ハケ	ケズリ	ACE	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第8図9	12住	弥生	甕	(24.0)	-	-	(6.6)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	BCD	やや不良	淡赤褐色	黄褐色	
第8図10	15住	弥生	壺	(21.8)	-	-	(16.6)	ハケ・ナデ・指押さえ	ナデ	BCDE	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第8図11	15住	弥生	高杯	-	-	(18.6)	(5.5)	ハケ・ミガキ	ハケ・ナデ・指押さえ	BC	良好	褐色	黄褐色	
第8図12	15住	弥生	高杯	-	-	(12.8)	(7.1)	ハケ	ハケ	ACD	良好	黄褐色	黄褐色	
第8図13	15住	弥生	器台	(11.0)	-	-	(10.6)	ハケ	ハケ・ナデ・指押さえ	CDE	良好	黄褐色	黄褐色	一部被熱
第8図14	19住	弥生	甕	(14.4)	(16.1)	-	(21.8)	タタキ・ナデ	ナデ	ABD	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	外面スス付着
第8図15	19住	弥生	壺	-	(26.4)	-	(18.6)	ハケ・ナデ	ハケ？	ABCDE	良好	赤褐色	赤褐色	スス付着
第8図16	19住	弥生	甕	-	-	(2.2)	(9.5)	指押さえ	ナデ・指押さえ	ABCDE	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第8図17	19住	弥生	甕	-	-	(8.4)	(6.9)	ハケ	ハケ・指押さえ	ABCE	良好	赤褐色	淡茶褐色	
第8図18	19住	弥生	甕	-	-	6.2	(12.1)	ハケ・ナデ	ハケ・指押さえ	ACD	良好	暗褐色	褐色	
第8図19	19住	弥生	器台	5.0	-	8.9	8.1	ナデ	ナデ・指押さえ	ABCD	良好	赤褐色	赤褐色	完形
第8図20	19住	弥生	器台	(12.1)	-	(12.2)	19.0	・ナデ	ナデ・指押さえ	ACD	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第8図21	21住	弥生	鉢	(27.8)	-	-	(6.9)	ハケ	ハケ・ミガキ	BCE	やや不良	黒褐色	黒褐色	
第8図22	24住	弥生	器台	(9.8)	-	-	(6.1)	ハケ　ナデ	ハケ・ナデ	BCDG	やや不良	暗褐色	暗黄褐色	
第8図23	26住	弥生	甕	(14.2)	(18.6)	-	(14.5)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ACE	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第8図24	26住	弥生	甕	(17.4)	(16.4)	(5.2)	20.9	ハケ・ナデ	ハケ	ABC	良好	淡赤褐色	淡黄褐色	スス付着
第8図25	26住	弥生	甕	16.6	-	-	16.2	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ACD	良好	褐色	褐色	
第8図26	26住	弥生	壺	-	(28.0)	-	(8.7)	ハケ・ナデ・タタキ	ハケ	ACD	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	線刻あり
第8図27	28住	弥生	手捏土器	(9.6)	-	(3.3)	5.8	指押さえ	ナデ・指押さえ	ABCDE	やや不良	暗褐色	暗褐色	
第8図28	28住	弥生	甕	-	-	-	(4.0)	ハケ・ナデ	ナデ	ACE	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第8図29	28住	弥生	壺	(15.2)	-	-	(6.9)	ハケ・ナデ・指押さえ	ナデ	ACDE	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第8図30	29住	弥生	甕	-	-	-	(6.9)	ナデ・タタキ	ハケ・ナデ	ACD	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第8図31	32住	弥生	器台	(16.0)	-	(18.4)	21.9	ハケ・ナデ　指押さえ	ナデ	ABCD	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	一部朱付着
第8図32	32住	弥生	甕	(20.6)	(22.8)	-	(30.5)	ハケ・ナデ	ナデ？	ACD	良好	暗褐色	淡褐色	
第8図33	32住	弥生	甕	(16.4)	(24.6)	-	(25.0)	タタキ・ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ACD	良好	赤褐色	暗褐色	スス付着
第8図34	32住	弥生	甕	(17.2)	-	-	(9.7)	ハケ・ナデ・指押さえ	ハケ・ナデ	ABCD	良好	暗茶褐色	暗褐色	
第8図35	32住	弥生	甕					ハケ・ナデ	ハケ・ナデ					
第8図36	32住	弥生	高杯	-	-	13.0	(9.2)	ハケ・ナデ・ケズリ	ナデ	ABCD	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	内面一部朱付着
第8図37	32住	弥生	鉢	(20.6)	-	(14.2)	6.9	ハケ・ナデ	ナデ	BCD	良好	淡褐色	淡褐色	スス付着
第8図38	32住	弥生	甕	(25.6)	27.6	6.6	38.7	ハケ・ナデ・タタキ	ハケ・ナデ	ABCDE	良好	暗褐色	淡褐色	
第11図1	33住	弥生	壺	-	11.0	-	(9.6)	ハケ・ナデ	ナデ・指押さえ	ABCD	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	一部朱付着
第11図2	33住	弥生	鉢	(14.0)	-	-	8.1	ハケ・ナデ	ナデ・指押さえ	ABCD	良好	暗褐色	暗黄褐色	
第11図3	33住	弥生	高杯	-	-	(17.0)	(7.0)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ABCD	良好	淡黄褐色	淡赤褐色	一部スス付着
第11図4	35住	弥生	甕	(15.6)	(17.1)	(2.0)	13.9	ハケ・ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	ACD	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第11図5	35住	弥生	壺	(20.2)	-	-	(11.0)	ハケ・ナデ	ナデ	CDE	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第11図6	35住	弥生	甕	(19.0)	(21.0)	-	(24.0)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ADE	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第11図7	37住	弥生	甕	(22.4)	(24.6)	-	(32.0)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	BCD	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第11図8	35住	弥生	高杯	-	-	-	(10.6)	ハケ	ナデ	AC	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第11図9	37住	弥生	高杯	-	-	(16.0)	(14.6)	ハケ・ナデ	ハケ・指押さえ	ACD	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	内面一部朱付着
第11図10	38住	弥生	壺	(15.6)	(18.8)	-	(7.0)	ナデ	ナデ	ADE	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第11図11	2竪	弥生	甕	(11.0)	(13.0)	-	(8.5)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指押さえ	ABCD	良好	淡赤褐色	淡茶褐色	
第19図1	1住	土師	甕	(14.4)	-	-	(5.1)	ハケ？・ナデ	ナデ・ケズリ	ACD	良好	淡赤褐色	暗茶褐色	
第19図2	1住	土師	椀	(16.0)	-	-	(3.4)	ナデ・ミガキ	ミガキ	ACE	良好	黒褐色	黒褐色	
第19図3	3住	須恵	坏蓋	(13.6)	-	-	(4.8)	回転ヘラケズリ・ナデ	回転ヘラケズリ・ナデ・不整方向ナデ	AE	良好	灰黒色	灰黒色	外面全体に自然釉
第19図4	3住	須恵	坏蓋	(14.0)	-	-	4.2	回転ヘラケズリ・ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ・不整方向ナデ	AE	やや不良	灰白色	灰白色	
第19図5	3住	土師	甕	(19.2)	29.0	7.2	34.5	ハケ？・ナデ	ナデ・ケズリ	ABCDE	良好	暗赤褐色	赤褐色	
第19図6	3住	土師	甕	11.2	12.5	-	12.6		指押さえ	ACE	良好	明赤褐色	暗茶褐色	
第19図7	3住	土師	甕	(13.8)	17.0	-	20.6	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ	ACE	良好	赤褐色	暗茶褐色	
第19図8	4住	土師	甕	(28.8)	-	-	(12.7)	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ	ABCD	良好	黄褐色	淡赤褐色	
第19図9	4住	土師	甕	(26.6)	(22.2)	-	(12.8)	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ	ACE	良好	暗褐色	黒褐色	
第19図10	5住	須恵	高杯	-	-	(8.4)	(5.5)	回転ナデ	回転ナデ	ABE	良好	灰白色	灰白色	
第19図11	7住	須恵	坏蓋	8.2	-	-	3.2	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ不整方向ナデ	CE	良好	灰黒色	灰黒色	完形
第19図12	7住	須恵	坏蓋	(12.2)	-	-	(3.3)	回転ヘラケズリ	回転ナデ	CE	良好	灰黒色	灰白色	一部自然釉
第19図13	7住	土師	坏	13.4	-	-	6.5	回転ナデ	ナデ・ケズリ	BCH	良好	赤褐色	赤褐色	ほぼ完形
第19図14	7住	土師	椀	(14.4)	-	-	(4.5)	ナデ・ケズリ	ナデ・ミガキ	ACDE	良好	暗赤褐色	赤褐色	
第19図15	7住	土師	甕	(19.2)	-	-	(8.0)	ナデ・ケズリ	ハケ・ナデ・ケズリ	ABCDE	良好	淡黒褐色	暗赤褐色	
第19図16	7住	土師	甕					ナデ						
第19図17	7住	土師	甕	(13.6)	-	-	(7.9)	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ	ABC	良好	暗赤褐色	黒褐色	外面被熱、内面スス付着
第19図18	7住	土師	甕	13.2	-	-	(4.5)	ナデ	ナデ・ケズリ	ACE	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	
第19図19	7住	土師	甕	(15.0)	-	-	(7.9)	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ	BCE	良好	赤褐色	赤褐色	スス付着
第19図20	11住	須恵	坏蓋	(10.6)	-	-	(2.8)	回転ヘラケズリ	回転ナデ不整方向ナデ	AC	良好	灰黒色	灰黒色	

単位cm　（ ）は現存長　胎土　A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

第2表　出土土器観察表（2）

挿図番号	遺構名	層位	器種	法量 口径	頸部径	底径	器高	調整 外面	内面	胎土	焼成	色調 外面	内面	備考
第19図21	11住	須恵	高杯	(9.8)	-	(6.2)	6.6	回転ヘラケズリ、ナデ回転ナデ	回転ナデ	AE	良好	灰黒色	灰黒色	自然釉付着
第19図22	13住	須恵	高杯	(5.6)	-	-	(2.1)	回転ナデ	回転ナデ	AE	良好	灰白色	灰白色	
第19図23	13住	土師	甕	(21.4)	(18.6)	-	(10.8)	ハケ？・ナデ	ナデ・ケズリ	ABCDE	良好	黄褐色	黄褐色	外面上半にススが付着
第19図24	14住	須恵	蓋	(11.4)	-	-	(2.1)	回転ヘラケズリ	回転ナデ不整方向ナデ	AE	良好	灰白色	灰白色	
第19図25	14住	須恵	杯身	(14.0)		-	(3.0)	回転ヘラケズリ回転ナデ	回転ナデ	ABE	良好	明灰褐色	明灰褐色	
第19図26	14住	須恵	杯身	(12.6)	-	-	(2.8)	回転ヘラケズリ回転ナデ	回転ナデ	AE	良好	灰白色	灰白色	
第19図27	17住	須恵	杯蓋	(15.6)	-	-	3.1	回転ヘラケズリ回転ナデ	回転ナデ	AE	良好	灰褐色	灰褐色	
第19図28	17住	須恵	杯蓋	(14.2)	-	-	4.6	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ、ナデ	CE	良好	灰黒色	灰黒色	
第19図29	17住	土師	鉢	(15.6)	-	-	(6.5)	ナデ・ケズリ	ナデ	ACD	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第19図30	17住	土師	高杯	-	-	13.4	(9.4)	ケズリ		AC	良好	淡黄褐色	黄褐色	
第19図31	18住	土師	甕	(13.3)	(13.0)	-	(5.0)	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ	BCDE	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第19図32	20住	土師	甕	(14.2)	-	-	(8.3)	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ	ABCE	良好	淡赤褐色	淡黄褐色	
第19図33	22住	須恵	杯身	(12.2)	-	-	(2.5)	回転ヘラケズリ回転ナデ	回転ナデ	AE	良好	灰白色	灰白色	
第19図34	22住	須恵	壺	-	(11.6)	-	(6.0)	回転ヘラケズリ・ナデ回転ナデ	回転ナデ	AE	良好	灰褐色	黄灰褐色	
第19図35	22住	土師	甕	(17.2)	(17.2)	0.6	(10.9)	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ	BCDE	やや不良	暗褐色	赤褐色	
第19図36	25住	土師	甕	(13.6)	-	-	(3.8)	ナデ	ナデ・ケズリ	ABCE	良好	淡赤褐色	茶褐色	
第19図37	27住	土師	甕	(16.7)	-	-	(5.0)	ナデ	ナデ・ケズリ	ABC	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	
第19図38	25住	土師	鉢	(26.2)	-	(19.2)	11.4	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ABCE	良好	暗褐色	赤褐色	底面タタキ
第19図39	31住	土師	甕	(24.0)	-	-	(12.8)	ナデ	ナデ・ケズリ・指押さえ	ABCD	良好	淡黄褐色	暗褐色	ススが付着
第19図40	31住	須恵	杯身	(12.2)	-	(5.2)	4.1	回転ヘラケズリ回転ナデ	回転ナデ不整方向ナデ	AE	良好	明灰褐色	明灰褐色	
第19図41	36住	土師	杯蓋	(16.0)	-	-	3.1	回転ヘラケズリ回転ナデ	回転ナデ不整方向ナデ	ADE	良好	明赤褐色	明赤褐色	模倣杯か
第19図42	36住	須恵	杯身	-	-	-	(2.3)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・ナデ	AE	良好	灰黒色	灰黒色	一部自然釉
第19図43	36住	土師	甕	(16.0)	-	-	(9.7)	ハケ・ナデ	ハケ・ケズリ・ナデ	ADE	良好	暗褐色	黄褐色	
第19図44	36住	土師	甕	(16.8)	(14.6)	-	(6.2)	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ	ACDE	やや不良	淡赤褐色	淡黄褐色	
第19図45	39住	須恵	杯蓋	(12.6)	-	-	(4.0)	回転ヘラケズリ、ナデ	回転ナデ不整方向ナデ	AE	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	
第19図46	39住	須恵	杯蓋	(11.8)	-	-	(2.7)	回転ヘラケズリ・ナデ	回転ナデ	AE	良好	灰黒色	灰黒色	
第19図47	39住	須恵	杯身	(11.2)	-	-	(3.3)	回転ヘラケズリ回転ナデ	回転ヘラケズリ、ナデ	AE	良好	茶褐色	灰茶褐色	
第19図48	41住	須恵	長頸壺	-	-	-	(7.6)	回転ナデ	回転ナデ・タタキ	AE	良好	灰黒色	灰黒色	
第19図49	41住	須恵	杯身	(11.0)	-	-	(3.4)	回転ヘラケズリ回転ナデ	回転ナデ	AE	良好	灰褐色	灰褐色	
第19図50	42住	土師	高杯	-	-	-	(2.4)	ナデ	ナデ	ACDE	やや不良	赤褐色	赤褐色	
第19図51	1竪	須恵	杯身	(10.4)	-	-	(3.0)	回転ヘラケズリ、ナデ	回転ナデ	AE	良好	灰白色	灰黒色	
第19図52	1竪	土師	甕	(17.0)	-	-	(4.3)	ナデ	ナデ・ケズリ	ABC	良好	暗赤褐色	暗黄褐色	
第19図53	1溝	土師	椀	(11.0)	-	-	(5.6)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ACE	良好	赤褐色	赤褐色	
第19図54	1溝	土師	椀	(13.0)	-	-	(5.5)	ナデ・ケズリ	ナデ	ACD	良好	赤褐色	赤褐色	

単位はcm。（ ）は現存長。　胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

第3表　出土石器観察表

挿図番号	遺構名	器種	石材	長さ（直径）	幅（孔口径）	厚さ	重さg	備考
第12図1	8住	石鏃	片岩	(12.3)	5.3	1.0	127.9	未製品
第12図2	26住	石鏃	頁岩	(5.1)	4.2	(0.6)	19.1	
第12図3	19住	石鏃	安山岩	(4.6)	(4.2)	0.5	12.5	
第12図4	28住	石鏃	頁岩	(6.1)	3.6	(0.6)	17.4	
第12図5	32住	石鏃	片岩	(4.1)	(4.0)	(0.4)	20.9	
第12図6	12住	石鏃	安山岩	(4.3)	(3.6)	(0.5)	13.6	
第12図7	10住	砥石	砂岩	(1.5)	2.6	1.0	7.9	
第12図8	35住	砥石	礫	(5.5)	4.5	2.6	95.4	
第12図9	33住	柱状片	砂岩	4.0	1.1	1.1	10.2	
第12図10	33住	刃	砂岩	(9.8)	6.4	5.9	290.2	
第12図11	2竪	砥石	粘板岩	4.5	1.7	1.4	15.9	柱状片刃の転用?
第12図12	33住	砥石	砂岩	(5.1)	4.4	1.3	35.5	
第12図13	32住	砥石	粘板岩	(9.6)	4.3	1.1	68.3	全面研磨
第12図14	32住	砥石	蛇紋岩	(7.5)	(7.4)	2.6	257.9	
第12図15	28住	磨製石	安山岩	(5.6)	(4.1)	2.4	83.7	
第12図16	8住	斧	流紋岩	(6.9)	6.8	(2.4)	226.8	
第13図1	15住	磨製石	黒曜石	1.8	1.0	0.4	0.7	
第13図2	26住	斧	黒曜石	2.2	1.4	0.4	1.4	
第13図3	33住	磨製石	安山岩	3.0	1.3	0.4	1.5	

第4表　出土石製品観察表

挿図番号	遺構名	器種	石材	長さ（直径）	幅（孔口径）	厚さ	重さg	備考
第20図1	3住	紡錘車	滑石	4.7	0.8	1.5	44.3	
第20図2	3住	紡錘車	滑石	(2.2)	(0.9)	1.4	16.2	
第20図3	3住	紡錘車	滑石	(3.6)	(0.7)	1.5	13.2	
第20図4	5住	紡錘車	滑石	(4.1)	(0.8)	0.9	11.8	

第5表　出土土製品観察表

挿図番号	遺構名	器種	胎土	長さ（直径）	幅（孔口径）	厚さ	重さg	備考
第20図8	26住	勾玉	ADE	3.5	3.4	1.5	12.1	孔は貫通してない
第20図13	15住	丸玉	ADE	2.0	0.3	1.8	5.2	
第20図14	19住	丸玉	ADE	1.5	0.2	1.0	4.2	完形
第20図15	32住	丸玉	ADE	1.6	0.2	1.6	3.0	
第20図16	32住	丸玉	ADE	1.5	0.2	1.2	2.5	
第20図17	26住	管玉	ADE	3.5	3.4	1.5	12.1	

胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

第6表　出土鉄器観察表

挿図番号	遺構名	器種	長	幅	厚さ	重さg	備考
第20図5	10住	刀子	(7.0)	1.3	0.3	20.9	
第20図6	26住	刀子	(6.0)	1.7	0.2	14.6	
第20図7	17住	鉄鏃	(3.1)	(0.9)	(0.3)	4.0	

※単位はcm。（ ）は現存長

第7表　出土玉類観察表

挿図番号	遺構名	器種	石材	長さ	幅	孔径	重さ	備考
第20図9	3住	管玉	碧玉	2.2	0.9	0.3	0.2	暗緑色
第20図10	3住	管玉	碧玉	1.5	0.6	0.2	1.4	暗緑色
第20図11	3住	管玉	碧玉	1.1	0.4	0.1	0.4	暗緑色
第20図12	3住	管玉	碧玉	1.3	0.3	0.2	0.2	暗緑色

写真図版１

①本村遺跡全景（南東より）

②本村遺跡全景（真上より）

③２・43号竪穴住居跡完掘状況（東より）

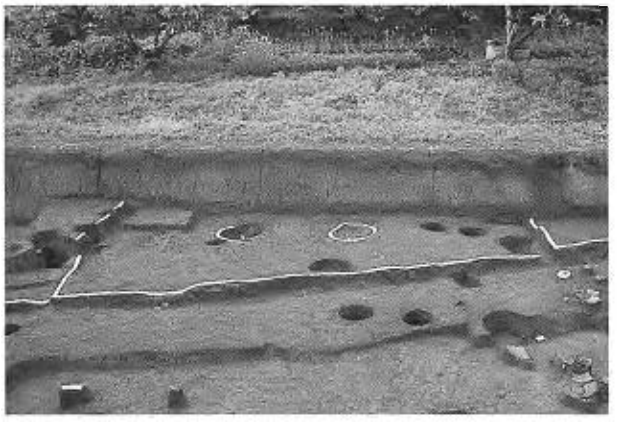
④８号竪穴住居跡完掘状況（南東より）

⑤９・10号竪穴住居跡完掘状況（南より）

⑥12・37号竪穴住居跡完掘状況（南より）

⑦19号竪穴住居跡完掘状況（南東より）

⑧21号竪穴住居跡完掘状況（南より）


①24号竪穴住居跡完掘状況（南より）

②26号竪穴住居跡完掘状況（南より）

③28号竪穴住居跡完掘状況（南より）

④32号竪穴住居跡完掘状況（南より）

⑤33号竪穴住居跡完掘状況（南より）

⑥35号竪穴住居跡完掘状況（南東より）

⑦38号竪穴住居跡完掘状況（南より）

⑧２号竪穴遺構完掘状況（南より）

写真図版３

①１号竪穴住居跡完掘状況（南より）

②３号竪穴住居跡完掘状況（南東より）

③４号竪穴住居跡完掘状況（西より）

④５号竪穴住居跡完掘状況（南より）

⑤７号竪穴住居跡完掘状況（南東より）

⑥11号竪穴住居跡完掘状況（南より）

⑦13号竪穴住居跡完掘状況（南より）

⑧14･16号竪穴住居跡完掘状況（南より）

①17号竪穴住居跡完掘状況（南東より）

②22号竪穴住居跡完掘状況（南より）

③23･25号竪穴住居跡完掘状況（南より）

④31号竪穴住居跡完掘状況（南より）

⑤34号竪穴住居跡完掘状況（南より）

⑥41号竪穴住居跡完掘状況（東より）

⑦1号竪穴遺構完掘状況（南より）

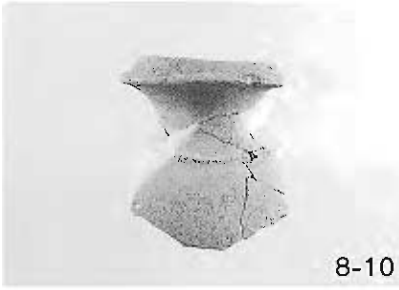
⑧１号溝発掘状況（南より）

写真図版５

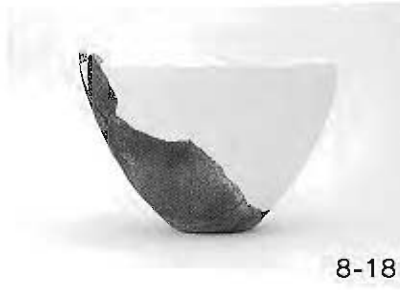
7

8-1

8-4


8-10

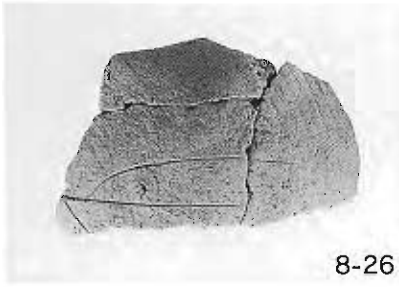
8-14


8-18

8-19

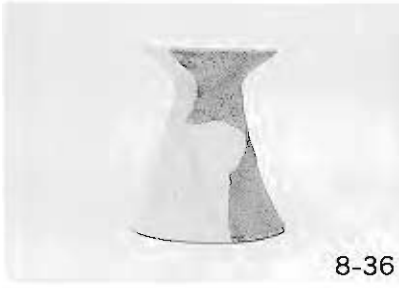
8-23

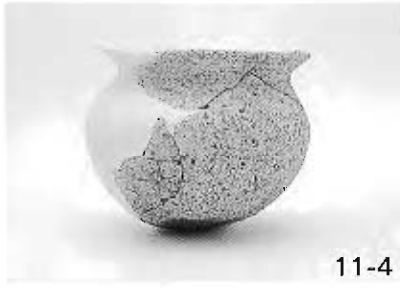
8-25

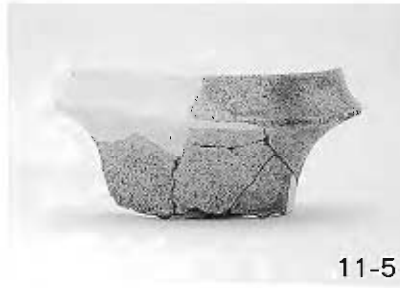

8-26

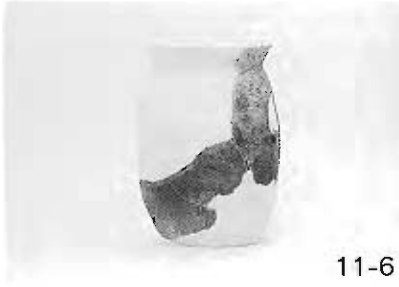
8-31

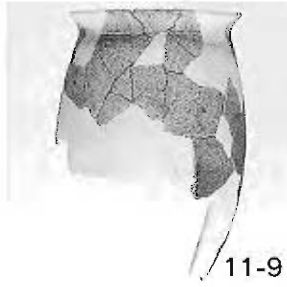
8-35

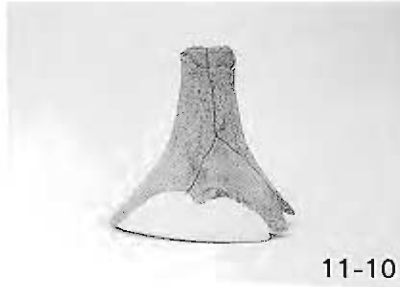

8-36

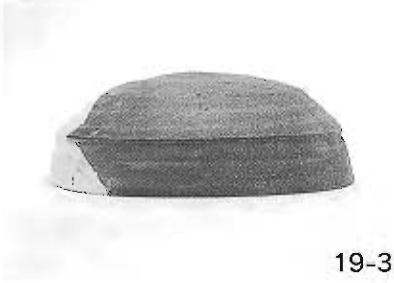

11-4


11-5


11-6


11-9

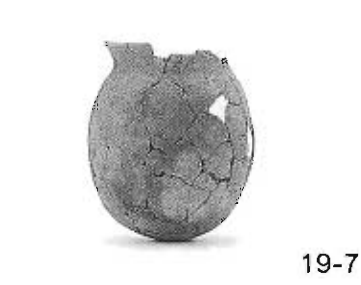

11-10


19-3

19-4

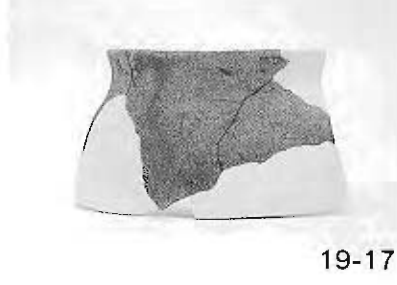
19-5

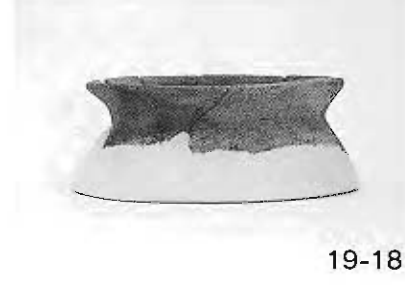
19-6


19-7

19-11

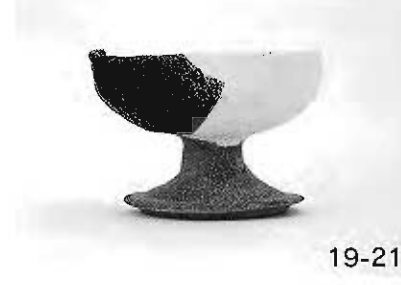
19-13


19-17


19-18

19-19

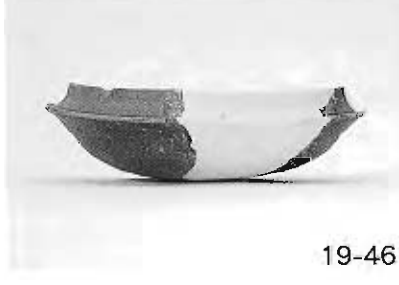
19-20


19-21

19-30

19-37

19-40


19-46

19-49

19-53

写真図版７

12-2

12-4

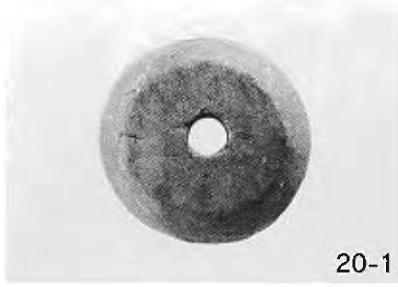
12-9

12-11

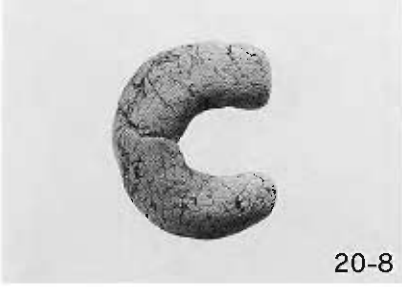
12-16

13-2

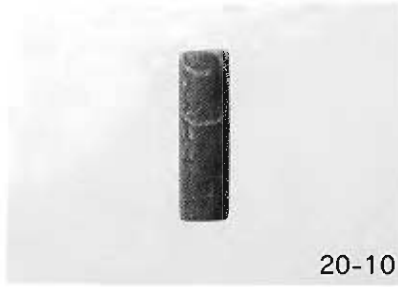
13-3

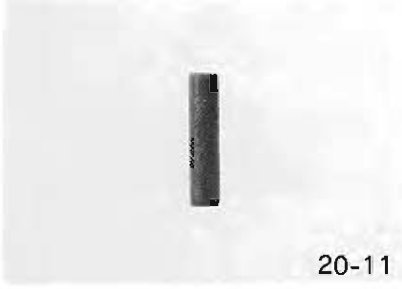

20-1

20-2


20-8

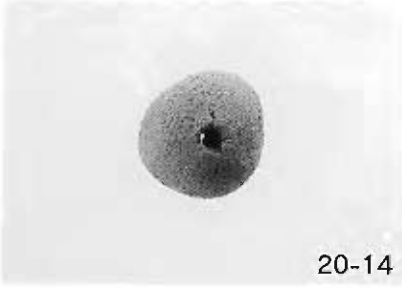
20-9

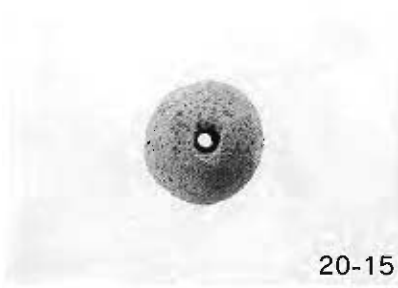

20-10

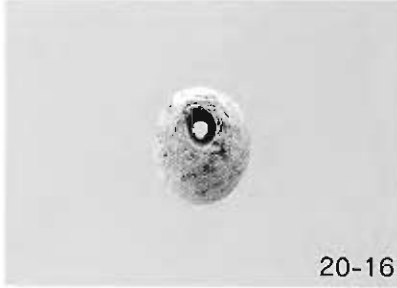

20-11

20-12

20-13


20-14


20-15


20-16

報告書抄録

ふりがな	ほんむらいせき3じ
書名	本村遺跡3次
副書名	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	51
編著者名	若杉竜太
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877-0077　日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2004年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
本村遺跡	大分県日田市 大字渡里字本村 936番地1ほか	44104-6	65	33°20′18″	130°55′50″	20010213 ～ 20010531	450㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本村遺跡	集落跡	弥生 古墳 古代 中世	竪穴住居跡18軒、竪穴遺構1基 竪穴住居跡18軒、竪穴遺構1基溝1条 竪穴住居跡6軒 掘立柱建物2棟	弥生土器、鏡片、玉類、石器 須恵器、土師器、石製品 須恵器、土師器 黒色土器、青磁	

本村遺跡3次

2004年3月31日

編集　日田市教育委員会文化課
877-0077　大分県日田市南友田町516-1
発行　日田市教育委員会
877-8601　大分県日田市田島2-6-1
印刷　森印刷有限会社